

「は、は、は、それほど心配する事でも無いが、さて其まゝにも捨て、置きぬ奴、何とか工夫せずばなるまいの」

「さやうで御坐います、こゝで自分が姪の事を申し上げちやア恐れ入りますが、元來あの梅が性質、まづ世間に並べて年の割には、さのみ根からの白痴でも無し、また物に驚いて狼狽へませぬ女で御坐いますから、もとの身でさへ居りますりやア、たとひ上汐の勘太め、どれほど募りませうとも、どうか斯うか自分で自分の一料簡、すつと外して柳の風を受ける分別も致しませうが、只今ぢやア、かやうに有難い御恩を蒙って居るのみか、第一が自分の戀の弱身から、は、は、は、は、どういふもんか近來は萬事却つて小兒のやうに相成りました」

「は、は、は、さうでもない、なか／＼梅は心の確な女だ」

「いくら氣が張って居りまして、女といふもなア、心の頼りが出来ますと、急に弱

くなつて、いやもう、たはひが御坐いませんから、いづれ御意に觸るやうな愚癡も無理も申し上げませうが、何分まだ、あの年で萬事が不行届きの上、生涯たゞ御一人を力に致して居ります女の事、どうか行末ながう、お見捨なく願ひ上げます、何の御縁か、吹けば飛ぶ水茶屋風情の賤しい家業で、御身分柄と申し御人品と申し、實に彼女は思ひがけない幸福者で」

「いや、あれまで人の騒いだ兩國の名物としては、高が二千石の次男、ちと喰ひ足るまい、僥倖か不幸か分らない事だ」

「お言葉、痛み入ります、なほ此上のお願ひには、よし奥様をお迎へに相成りませうとも、どうか彼女だけは、あのまゝで未長くお目かけられますやう、もしこれが我々同士の慣れた言葉で、ひらつたく申し上げますりやア、打明けたところ、慾も利もねエこつて、なアに母子二人ぐらエは此伯父が臺所の端でも養つちやアやるが、

實ア本人の心を波んで野暮のねエところ、死ぬまで惚れ込んだ戀の本望を飽くまで遂げさせてやりてエばかりさ、時と場合ぢやア随分これまで摺った揉んだと前後左右から故障が湧いて出て、むづかしい他人の戀中でせエ一息に結んでやツた男だ、まして彼女ア乃公が一人の好だア、はッはッはッとまづ斯やうな次第で御坐いますから、不束なところは幾重にもお叱り遊ばして、どうか此ま、末長く、願ひ上げます」

「は、は、は、その言葉は談話が早くて理に近くて面白い、其事に就いて、過日も梅に申し聞かせし通り、もはや妻帯は致さん覺悟だ、たとひ浪人しても二人もろとも落ちて暮さうと、は、は、は、馬鹿な事まで打明けての」

「いや、その御一言は何より、どれほど本人が喜びまして御坐いませう、恐れながら御縁の端に縋ります拙者までが、此上もない大慶に存じます、以後は何卒、御家來

同様に思召して、御用を、御用といへば上汐の勘太め、彼奴いかゞ致したもんで御坐いませう、貴方様や拙者どもならば、たとひ闇の夜の脚下から不意に飛び付いても高が血迷った舟乗奴の三人五人、しかし世諺にいふ道具外れの急所で、彼奴が一生命に規つて居ります的が梅で御坐いますから、彼女に萬一の怪我をさしては、いかにも無念に」

「されば梅に萬一の事あつては取返しかならん、しかし今夜の様子では、我々は借置き、まづ梅の居所を探つて居るやうだな」

「さやうで御坐います、承れば去年の夏お月見の時、お手際は存じて居ります上に、また拙者には眞正面から手も足も出せない奴、そこで彼奴いよく苦しませの焼腹を絞つて、本人の梅を何とか致す覺悟で」

「む、それに相違ない、ところで梅を如何いたしたものであらうな」

「そこで御坐います、甚だ恐れ入りますが、暫時の間、お邸宅へ、勿論、拙者が親元と相成、貴方様は更に御存じのない體で、お腰元にでも差上げましては」

「さ、其事に就いて、先夜も梅に申した通り、もし邸宅へ呼ぶならば後日のため奉公人として入れたくない、こゝ、兩三年も経てば必ず父が隠居せられて兄が世になる筈、さて其後に次男の身が定まるといふもの、同じくは身の定め際に梅を呼びたい、假親假里は往々ある事、急いては却つて互の爲に宜しくなからう」

「こりやアまた冥加に餘つた御意で、たゞ恐れ入りますばかり、たとひ、たとひ、萬一、萬々一さやうの思召が御坐いませうとも、そのことは暫時、梅に御意遊ばさないやうに願ひます、もし、そんなことを夢にも知りました以上は、何と申しても女の浅い心で、嬉しさの餘り氣が取上せて、却つて本人の身のために相成りませんから」

「は、は、は、は、もはや梅に、打明けて仕舞つたぞ」

「や、これは少々、早まって御馳走を遊ばし過ぎたかと存じます、しかし其御馳走を戴き過ぎて食滯いたしませぬやう拙者が、またよく申し聞かして療治いたさせますから、は、は、は、は、とところで差當つて梅の身、さういふ御意を承る上は猶更の事、いよく以て彼奴等風情に指一本でも」

「さ、せない工夫を」

「及ばずながら、この上州勝、いや勝藏が確と受合ひました、いづれ改めて梅より委細の手筈萬端を申し上げさせますから、まづそれまでは一切お竊やかに願ひ上げます」

「よろしく頼むぞ、途中なごで萬一の事あらば幸ひ却つて斬り捨てるも易いが、さて自分わざく押掛けて何とも出来ぬ奴だからな」

「は、は、は、は、仰せの通り俗に申します銀と鉛の目分量、お慰みにも致せ、あのやうな奴には、なるべく、お避け遊ばす方が結果の御勝利かと存じます」

「は、は、は、は、遁けるが勝といふ兵法かな」

「拙者とて、路傍の非人に追はれちやア三十六計の奥の術、向脛に馬の字を書いて駈け出します外には、は、は、は、は、しかし、この寒氣の厳しい夜中、いつまでも御意を得ましては却つて恐れ入りますから、これで御免を蒙ります」

「む、それは兎も角、先刻のやうに蒼蠅い奴が附纏ふ折柄、大丈夫とは存するが、途も遠し夜も更けたるのみか、あの死骸の事で辻番や町内の者どもが立騒いで居るところへ」

「なるほど、ぢやア今夜は大事を取りまして、母屋で一夜」

「それく、泊つて行くが宜からう、いづれ明朝あらためて」

「梅は只今すぐ伺はせますから、彼女め、自分の事と存じて、わざと差控へて居りましたので、は、は、は、は、」

庭を隔てし奥の離亭には樹間がくれの窓を漏る、燈火の影、終夜の戀に何をか私語きけん、母屋の方の一室には上州勝、また一室には母親と下女、三方いづれも思ひくくの夢を結びて、いつしか明け放れゆく東天の空に鴉の一聲二聲、やがて軒の雀も囀りて、きぬぐの別れに憎やと唄ふ鐘の音もこ、には壁一重の天神に朝參詣の拍手うつて鈴の音ちやらくと聞えつ、はや要助が迎ひの體に小三郎そのま、起き出づれば、母も上州勝も戸口に迎へて送り出す背後より、鬢の毛の一筋二筋みだれか、りて冬の夜長も短かしとぞ思ふお梅が風情、戀の迎ひの要助が顔じろりと恨めし氣に睨めば、おもはず首を縮めて袖の下より掌を合しつ、何をするかと主に叱られて其ま、立去

りぬ、

あとには上州勝とお梅、そのまゝ、伴うて奥の離亭に差向ひながら、戀の空巢を覗ふ曲物ならねど、互に心と心とに示し合うたる胸の一物、餘所へは漏らさじと膝を進め聲を潜めて打語りぬ、

「本物と風聞ア四分六か七三が世間普通、かけで聞いたばかりぢやア、まさか、あれほどの男振とも思はなかつたが、ありやア全く風聞よりも本物だ、なるほど白むく鐵火の名物女が戀の只中、無理のねエところだ、しかし、あんまり只中に陥り込んで無理の無さ過ぎた結果、例の謀反を忘れて仕舞ツちやア困るぜ、四十面さけた上州勝が骨折損の草臥れ儲け、上汐の二の舞になツちやア立たねエからな、はゝゝ、はゝゝ、」

「ほゝゝゝ、いくら女が初心だつて、まだ其處までは性根を取失ひませんから、まア安

心して下さい、しかし前夜は」

「萬事が上々首尾の山かづら、うまく傳つて乗り越えたがね、なか／＼外貌の男振ばかりぢやアねエ、ものゝ分別に寸隙が無くて總てが確りしたもんだよ、同じ邸宅へ入れるなら奉公人として入れたくないから、こゝ、兩三年の後この身の定まる時まで待てといふのさ、もし悪く考へりやア、まだ肌の許せねエところがあつて、その兩三年の間に篤と此方の氣性を見抜く決心か、但し口が心なら却つて僥倖だ、なまじひ窮窟な目をして嫌に手数のかゝった梯子段を上らねエでも、いはゞ一足飛の玉の興、たゞこゝに親御がまだ隠居しねエで兄様といふのが別に役を勤めてるといふから、ちと待遠いやうだがね」

「なアに二年が三年、よし五年でも六年でも、此方の黒いところを睨まれる氣遣ひは、ほゝゝゝ、却つて日が重なれば、重なるほど深く引入れるだけの事は、及ばずなが

ら妾の腕で、腕というては何だか憎らしいやうですが、まづ其處は互の情といふも
ンでね」

「さのみ憎らしうもねエがね、水茶屋女が戀の片手に二千石を掴まうといふなア餘り
情があり過ぎて可愛らしうも無からうよ、は、は、は、とこゝろで差當つて上汐の野郎、
彼奴ばかりは嘘も掛引もねエ全くの困つた奴だよ、前夜の約束ぢやア兎も角、この
鬼勝が受合つて引受けたんだが、さて始末に終へねエ狂氣さ、今こゝで呵しな間違
ひでもあつちやア萬事の失敗だからな」

「さア妾も其事がね、何とかして」

「何とかせざアなるめエよ、しかし、妙な意氣張で今年の二月まで互の男づくに手が
出せぬエ事になつてゐるから、もし其間に此家を見付けられちやア」

「いッその事、もう遁け隠れもしないで、妾が此家へ立派に呼び寄せて見ませうかね」

「呼び寄せる、呼び寄せて全體、どうする決心だ」

「どうも斯うもあるモンですかね、呼び寄せて酒でも出した上、いくら飛んでも跳ね
ても今は人の花だから過ぎ去つた昔の夢と萬事を男らしく諦めて下さい、もしまだ
未練があつて、それほどまでに妾を思つて下さるなら、とても遁れない苦しきまぎれに
言ふではないが、その執念深い凄いとこゝろを買つたお梅、濟まないこつたが今の旦那
那を何とかして妾の身を取つて下さいと、かう打ち出した方が却つて宜からうと思
ひますがね、つまり盜賊は金で、自分の事をいうては呵しいやうですが、かけで蹂
躪るほど憎くつても目に見れば惚れた戀の慾目で、根が妾を斬りも突きもしたくな
いのですよ、ほ、ほ、ほ、よし分つた、其料簡なら乃公も男だ、相手の武士を片づけて
主のない花にした上でと、言つたところで、なかく齒が立ちますまい、また此方の
氣を探る證據に手引しろといへば、する風で、そツと旦那へ吹き込んだ上、いよいよ

よ助たすからない瀬戸際せとぎはに落おしてやりますさ、またひと一事じには、お梅うめを探さがし出だした後のちに男をとこづくの勝負しょうぶをするといふンですなら猶更なほさらの事こと、こゝは親方おやかた、一番踏ほんふみ込こんで働はたらいて戴いたきたいので、妾わたしが逢あった以上いじやうは、どの道みちとも、お二人ふたりの手てにかゝつて死しぬ奴やつですからねエ、ほゝゝゝゝ」

「なるほど、こりやア驚おどろいた、いやさ、あけて今年ことしやうく十九のお梅うめさんに浮世うきよの場は敷かを踏ふんで来きた四十面しじゅうめんの鬼勝おにかつが驚おどろかされたよ、その細ほそい眞白まっしろな咽喉のどから今いまのやうな圖太づぶエ料簡れうけんがで出るンだもの」

「ほゝゝゝゝ、こんな生優なまやさしい手ぬるい事ことで驚おどろかれちやア、この後のちが心細こころほそくつて」

「ぢやア差當さしあたつて、まだ何か心太こころぶエ事ことがあるのかね」

「別に、太ふとい事ことでも無ないンですが、乗のりかゝつた舟ふねに帆ほを孕はらんだ事ことの序ついでですから、も一ひとり人ひとやつて貰もらひたいの」

「も一人ひとり、やれたア全體ぜんたい、誰だれのこつた」

「ちと勿體もつたいないやうですがね二千石ごふせんの世取よどりの、お兄様あにいさんを」

「えッ」

「腰元こしもと奉公ほうこうでも構かまはない、妾わたしが邸宅やしきへ這入はりさへすりやア、今いまの本人ほんじんよりも第一だいいちまづ親御おやごの心こころから動うごかして、兄あにを御爲おためごかしの分家ぶんけ、次男じなんを世取よどりにするだけの活動はたらきはして退のけますがね、こゝ、兩三年りやうねんも待まてといふ有難迷ありがためいわく惑まぢやア少々せうく、待遠まちどほですから、いつそ、今いまのうちに兄様あにさんを無ないものにして、親御おやごは自然しぜんの御隠居ごいんきょ、あとの二千石ごふせんを戀こひ男をとこに取とらして妾わたしは一足飛そくとびに乘のりり込こみたいの、ほゝゝゝ、いつぞやも言いふ通とほり、高たかの割わりには旗本中はたもとちゆうの内福ないふくで格式かくしきの宜いい家柄いんがらと聞きいて居ゐるのみで、これが何萬石なんまんごふせんといふ大名なみやうぢやアなし、實じつは慾よくばかりで無ないンですよ」

「むゝ其處そこまで度胸どきょうが据すわつて居ゐりやア乃公おれも上州勝じやうしゅうかつだ、鬼勝おにかつだ、もう驚おどろかねエ、呆あきれ

も驚きも通り越して感心の上盛だが、そいつアお梅さん、少々、脚下の運び方が慌て過ぎるやうだぜ、まづ暫時こゝは早まるところでねエさ、よく考へて、時機を見て外れねエ圖星を射抜くやうに、つまり敵を殺さねエで勝鬨をあける工夫が戦鬨の上手といふもんだ、また物の道理を言やア、罪のあるねエは兎も角、たゞの一度も逢った事のねエ者を闇討にするなざア本悪黨のする仕業ぢやねエ、さうなると女ア却つて氣短の一徹で怖ろしいよ、しかも現在の戀男の兄様ぢやアねエか、なるほど、その氣性だから、慾も利も捨て、自分の惚れた男を日陰に置きたくねエ、一時も早く世に出したいといふ、それも根は男の可愛さ餘つた情から起つた事にもしろ、あんまり手厳しいぜ、しかし、よくまア惚れ込んだもんだね、お梅さんの五體は死太エ度胸と凄い嘘八百で固めた中に、戀は身を喰ふ曲物、こればかりは本當の弱身だよ、はゝゝゝゝ」

ほゝゝゝさう聞けば妾が悪かつたから、そんな寢覺のよくない事は廢めにしますがね、いづれ兄様の譽め者にはなれませんよ」

「そりやア知れ切つた事さ、怨まれたり憎まれたりするくれエの覺悟ア宜いが、化けて出られるやうな事アまづ考へもんだ、よし百人の相手を叩き斬つても疊の上で死ぬ奴と、たゞの一人を殺しても三尺高い木の空で萬人に生首を曝す奴とあるのが、こゝのこつたから、度胸に委して、あんまり酷たらしい事アするンでねエよ、はゝゝ乙な縁で同じ道伴になつたから思つた事を隠さねエで言ふんだ、悪く聞かれちやア困る、まア年齢に免じてね、耳に入れて置く方が宜からう」

「なるほど、よく分りました、此後とも氣の付く事があったら、どうか遠慮なしに叱つて下さいよ、かりにも伯父姪になつてるンですから、ところで、今いうた上汐の事だけは」

「おツと、そいつアよし、妙だ、野郎なンざア、どの道とも遅いか早いかな年貢の納め時が来る奴だ、まして言はゞ彼奴から乗か、ツて来るンで、根も葉も残らねエこつた、萬一の用意に乃公も其時は忍ンで立聞きするから、そこでこそ思ふ存分に舐めてやるが宜い」

「しかし、安心して來ませうかね」

「當然に分別のある奴なら、見付け出しやア兎も角、呼び寄せられて來る筈はねエが、重なる怨恨と嫉妬に血迷ッて前後の思慮もねエ闇雲飛乗の野猪武者だから、きツと狼狽へて來るに相違ねエ、どツか此邊の町小使でも頼ンで實ア内々で話したい事があると言ひ込むのさ、それも外の野郎に漏れちやア無効だ、そツと本人の勘太たゞ一人の耳へ、後日に證據のねエ口で言ふこつたから少々お世辭を並べて、今までは妾が悪かつたぐれエの情合を含ませるさ」

「ほ、ほ、考へると、何だか可哀さうなやうですなエ」

「は、は、急に優しくなつたもんだね」

其四

平生より互の胸を明し合つたる間、まして此ごろは取別け力と頼みし五人の中の一人、ゆうべ三日の宵闇に紛れて立出でしま、更に歸らねば、上汐の勘太おもはず眉を擧めて小首を捻りし折しも、平河町の往來に斬り捨てられたる死骸は舟乗の體なりとて、第一に勘太が許へ觸書を廻されしかば、もしやと走せ出でて一目みるや否あツと驚いて無念の拳を握りつゝ、さてはと思ひしが、眼前それといふ證據も無いのみか、追て詮議すべきも餘り美事の手のうち武士の辻斬か試し斬なるべしといふ役人の手前、とても返らね骨を抱いて懃ひ賣り込みし男を潰さんよりはと、無言の涙を呑んで死骸を

其ま、引取りしが、いよく怨恨は五臟六腑に染み渡つて皮肉を躍らしぬ、されど兩國に住むものが思ひも寄らぬ平河町で斬られしは不思議の第一、その道の目に斬口を見て武士の手のうちといひしからは鬼勝でもなく、さては規ひし例の片相手に規はれ、不覺の返り討に逢ひ、しかもそれとすれば、平河町こそ、忍んで通ふ戀路の穴のお梅の隠れ家、ないにせよ遠くはあるまじ、おのれ其界限の草の根を分けても見逃すものか、一軒々々軒並びに漁つて引き摺り出さんと思ふ折しも、見馴れぬ一人の男が入り來りて我名を呼びしかば、何事ぞと出でて問ふ間もなく、一封の手紙を差置いて其ま、駈け出しぬ、

はて不思議な奴と、取上げて見れば女の筆ながら正しく我宛名に、いよく訝りながら封おしきれば、一枚の紙の端に何の文句もなく、たゞ平河天神の横町お梅といふ九字あるのみ、流石の勘太あつと呆れたる面體に怒憤の兩眼きろく、遙に戶外の方を

睨み詰めて大息はツと吐きぬ、

今まで人目を忍んで匂ひも漏らさざりし我身の居家を、血眼になつて日夜に探し廻りし其鼻頭へ、ぬツと差出せし今日の手紙の封おしきつたる面體いかなりしぞ、おもへば木でも石でも動いて飛び上るべき筈、まして怨恨と嫉妬に本性を取失うたる男、たとひ一度は呆れて怖れて二の足を踏むとも、いづれまた忽ち狼狽へて前後の差別もなく飛び込み來るべき奴と、母は下女を添へて一夜宿泊の川崎大師へ出しやりつゝ、その身は新たに髪を結び衣服を着替へ、さらぬも雪を欺く面に薄化粧を施して丹花の唇に奥紅を含みながら、錦上の花か、花上の露か、睡れる如く靜なる中に自然の情を帯び天生の愛敬を浮べて一入さらに艶を凝らせる體、よしや野原に立てる石地藏の首をも捻ぢ曲けて振り返らすべきほどの名物お梅、高が血の氣の狂ひし一疋の凡夫、はや

來れとぞ待ち受けぬ、

されど思ふ時刻に勘太の姿は見えず、今かくと待つ甲斐もなく、いつしか其日も暮れて入相の鐘の音は響けども、それかと耳敏つる足音も聞えねば、お梅おもはず小首を傾けつゝ、あはれ笑止や臆病風に吹き込められて五體を縮めしか、わざと今日を此まゝに過して不意に押寄せ來らんとてか、但しは夜に入つて後、飛ぶにも跳ねるにも幸ひの闇を待つて來る心かと、流石に嬉しき戀人ならねば、さらに油断なく燈火引き寄せて猶も待ち構へし折しも、門の戸を叩く音、

「兩國邊から來たもんだ」

いふは正しく上汐の勘太、お梅さらに一入の美音を含みつゝ、

「叩かなくツても開きますよ」

無言のまゝ戸を蹴破つて躍り込むかと思ひの外、軽く叩いて聲をかけし體、さては無

念の度を過ぎて死物狂ひの境目も越えつゝ、聊か膽魂を落着けて來りしごと、お梅いよ／＼覺悟しながら目色も變へす待ち受くれば、そろりと戸を引き開けて入り來りし上汐の勘太、燈火に照らして見れば、さのみ狼狽へたる用意の風もなく、しかも平生よりは衣服を着飾りて物靜なれど、たゞ腰に落せし大脇差と兩眼のみ凄じく光りぬ、

「去年の秋以來、天狗に掠はれたか人買にでも取られたか、どこへ何うして消えて失ツたかと、實ア陰ながら心配して居たが、思ひも寄らねエこつた、今日わざ／＼お知らせに預かるたア、はゝゝゝ、しかし相變らず達者で其後いよ／＼美しいもんだな、その火鉢の傍へ往つても、お梅さん、今夜ア叱り手がねエかね」

「ほゝゝ、まんざら知らない間でも無いんですから、其方にさへ萬事お構ひなくば、さア御遠慮なく、すつと、いくらでも」

「ぢやア近う寄ツて、久しぶりの御面相を拜みましょ、放れて居ちやア折角の談話に

氣が乗らねエ、また時と場合で、手も届かねエからな、しかし乃公が手の届く届か
ねエは儲置いて、お梅さん、今日の和女の念は慥に届いたぜ、この上の届きやうも
ねエくらるに届いたから、實ア、あんまり届き過ぎた御禮かたたく来たんだ」
いひつゝ、脱ぎ捨てたる履物に目を配り、やがてまた四邊じろく家内を見廻しながら、
のツそりと火鉢の前に大胡坐、

「なるほど、河岸ツ端の水茶屋と違つて嫌な川風の吹ツ込む氣遣ひはなし、うるせエ
野郎が朝夕に出入する筈もなし、過ぎし浮世を夢と見てさ、おつに澄した今の境涯、
なか／＼宜い家だな、しかし、まさか陥穿や釣天井ぢやアあるめエの」

「ほ／＼、いち／＼さう逆に出られては御挨拶に困りますから、萬事どうか平らに
願ひます、實は去年の秋以來、一度お伺ひ申さないぢや濟まないんですが、何だか
妙に出そゝくれて仕舞ツて」

「おい／＼お梅さん、呵しくもねエ世間普通の御挨拶は廢めた方が宜からうぜ、いく
ら口功者に文句を並べて饒舌ツても無効だ、は／＼、相手の居ねエ時、耳のある
壁にでも向ツて言ひなせエ」

「では暫時、妾は差控へて、たゞ承るばかりに致しませう、實は人手のない中から御
酒の用意もしてあるんですがね」

「は／＼、毒でも入れてあるんだらう、よし毒がねエにしろ、上汐の勘太、わざ
わざ此家へ酒を飲みに来たんぢやアねエ、戯けやアがるな、面くらはせの白むく鐵
火め、さんざ世話になるだけなツた曉、よくも男の面へ後足で砂をぶツかけたな、
さア今日といふ今日は百年目だ、うまく釣り寄せて深いところへ落す氣か、どんな
凄い仕掛があつて呼んだかア知らねエが、たツた一人で度胸を据ゑて来たんだ、じ
ろりと睨んだ家内の様子、うぬを囮にかけて伏勢のあるのも承知の上だ、は／＼、

此ごろの夜長に慌て、急きもしねエが、そこ動くな阿魔、今に用意の手土産を呉れてやるから」

叫ぶや否、折しも襖一重の彼方に煙草盆の灰吹を叩く音、ほん和高く聞ゆれば、勘太おもはず拳を握って兩眼を見張りぬ、

「どこの奴かア知らねエが、襖一重を楯に取って際どいところで灰吹の音、ほんといた煙管に鐵砲の名アあつても煙の中から玉ア飛んで來めエ、は、は、は、これが全く白痴をどしの空鐵砲だ、役にも立たねエ凄味を止して正體を現はせ、出るなら早く出る化物め」

ぐつと睨んで脇差引寄せ、片膝を立て、身を固むれば、お梅おもはず含みし微笑を崩して、ほ、と笑ひながら、

「あれですか、ありやア化物でも何でもない近ごろ來た食客ですよ、この家に陥穿が

あるか釣天井か酒も毒かと仰しやる氣ぢやア、なるほど灰吹の音も化物の聲に聞えませうがね、まさか野原でなし、山賊の棲家でもなし、どうか安心して下さい、もし御氣分でも悪けりやア近處の醫者へ駆け付けて呼んで來るくらゐに思つてる妾ですもの、御存じの通り脊に腹の替へられない苦しきまぎれに伊勢屋の證文一枚を取つたやうにして、ほ、ほ、ほ、まア貫つた覺えはありますが、どうか斯うか胸も痛めず其日々々を送つてる今更、釣天井や陥穿まで拵へて手数のか、つた人間の死骸なごア欲しくも御坐いませんよ」

「米ツ粒を縦にして叩ツ込むやうな小せエ口から相變らずお座の覺めた太エ事を吐す阿魔だ、なるほど去年は十八で今年は十九、一年ましに面の皮が厚くなつて唇端の薄くなるも道理だが、花の姿の鬼娘、あんまり呆れて物が言はれねエ」

「ものが言はれなくつても、うぬ、どうするか見ろ、今に今で言はせると仰しやるん

でせうが、まアそんな野暮ッたらしい事は儲置いて、いッそ、さッぱりと打解けて下さいな、自分勝手をいふやうですが、今までの事は水に流して仕舞ッて」

「は、は、は、それでも自分勝手と思ふだけが、まだ幾分か人間らしいところだ、しかし流せたア何を流すんだ、盆の精霊棚ぢやアあるめエし、流したッて功德にやアならねエぜ、但し今までの罪亡しに、乃公が得手の簀巻にでもして流してくれといふのか」

「ほ、は、は、そりやア時と場合で簀巻にも薦巻にもなりますがね、可愛い人の情の手枕で冬知らずの蒲團巻になッてる今の身では眞平お断りを申します、とさ、すぐ斯ういふ工合に賣言葉に買言葉が出ますから、まアそんな憎らしい事を言はずに右か左か、男らしう一本調子の青竹を割ッたやうに言ッて下さいな、さア今夜いよくうぬを殺しに來たとか、殺さないまでも引き摺り倒して蹂躪るとか、つまりは妾の

出やう次第で、ならない堪忍もしてやるとか何とか、たツた一言で分るやうにさへ言ッて貰へば、また妾も覺悟の極めやうがありますからね、ほ、は、は、は、いくら夜が長いッたッて薄氣味の悪い宙に吊られて居ては、なか／＼吊る方も骨が折れるばかりで埒が明きますまいから」

「む、よく言ッた、どこの奴が仕込んだかア知らねエが、去年よりやア悪度胸が据ッて來て、さうやら本筋の悪黨になッたやうだ、よし、その覺悟なら更めて言ふが、うぬを引ッ捕へて叩ッ斬らうと思ッたなアまだこゝまで怨恨の深くねエ時のこツた、いやで逃げたか怖クツて隠れたか何にしろ、その穴を乃公から見付けて引き摺り出した時のこツた、しかし其方から此家に居るといはれて來た今更、十九の女郎を捉へて手荒い事も出來ねエのみか、こいつア一番うまく遣られたと知ッて居ても現在その在家を名乗ッて出た殊勝さに免じて、いや實ア度を越して人情を飛ッ放れた面

の皮の厚さに呆れて問屋の卸し價値、ぐツと大負けに負けてやるから、この上汐の勘太に濟まねエと言ッて謝れ、しかし手を支へて口で謝ッても無効だ、この勘太の男を立て、謝れ、うぬも尋常の女と違ッて底を叩きやア臭エ塵埃の出る女、人の顔を踏み潰した申譯ぐれエは知ッてるだらう」

「やれく、それでこそ妾が思ひ切ッて此家をお知らせ申した甲斐があるといふもの、さう萬事、さッぱりと打解けて男らしう立派に出て貰へば、また此方も其氣で實は最初お世話になつた時のやうな心で、ほ、ほ、ほ、しかし口や手で謝ッても無効だ男を立て、謝れとは、全體どうして謝るンですか、ついでに其事も打解けて仕舞ッて下さいな、もし妾の料簡と違ッては、折角こゝまで解けて來た間が、また互に呵しな意地になりますから」

「なるほど、ぢやアお祭り衣裳を脱いで平ツたく常着のまゝに打ち出すから、其方も

眞實お化粧なしの素顔で、宜いか、外でもねエ、今の色男、あの武士と手を切ッて貰ひてエ」

流石のお梅、あツと呆れて驚くかと思ひの外、さらに不意を打たれし體もなく、燈火を掻き立て、火影に照り添ふ花の顔面、いよく冴えて色香を含みながら、勘太が顔ジツと見詰めて笑を漏らしぬ、

「ほ、ほ、どんな事かと思ッて居ましたに、まア際ぎいところで」

「實ア驚いたらう、いくら平氣の體でも少々まるツたらう、しかし、無理のねエ筈だ、さんざ世話になるだけ世話になつた結句の果、その恩も義理も踏み抜いた後足で砂をぶツかけて遁け隠れした今更、悪かつたから堪忍しろといふぐれエぢやア濟むめエ、是が非でも相手の武士と手を切ッてくれ、さッぱりと縁を絶つ以上、この勘太が何とするでもねエ、たとひ非人を男に持たうが乞食の女房にならうが、また大名

の手に飛び付いて鉄打乗物で歩かうが、河岸の材木小屋で薦一枚の情を賣る境涯に落ちて流れても、そりやア御勝手次第、もはや見向きもしねエが、今の武士に添って居られちやアこの癩癩玉が承知しねエから、すばりと音のするほどに縁を切つて貰ひてエ」

「あれ、いよく際どくなつて來ましたねエ、しかし、よく考へて見ると何だか筋道が横へ這入つて、わけが分らなくなつたやうに」

「何故、なぜ理由が分らねエ」

「ほ、ほ、ほ、もし、こんなどころを知らない人に聞かれたら、まるで深い色戀の痴話か口説のやうで、色戀といへば、そもく妻は最初から貴方と他人の間柄、お世話になる事は、なつても其事は別段の理由、ほんの座興で世辭愛敬の口約束にさへ言つた事のない間で、何のこつてす馬鹿らしい、あの人と手を切らなきやア乃公の面

が立つの立たないのと、ほ、ほ、ほ、いくら癩癩に觸つたつて、あの人が知つた事になしさ、しかし妾を殺すにも踏み潰すにも及ばないで、それほど相手の人が癩に觸つて堪らないなら、貴方も上汐の勘太といはれる男の腕、取るに足らない女を儲置いて何とか外に、ぐつとした工夫のありさうなモンですなエ」

「な、何といふんだ」

「いえさ、もし妾が男なら、思案も絲瓜もあるモンか、どうせ破れかぶれの傘一本、骨になる覺悟で癩に觸る相手の野郎を叩つ斬つた上、あとは兎も角、覘つた女を一夜でも自由にしてこそ少しは念の晴れるといふもの、それを女の方の弱身に附け込んで、のろい亭主が間男を見付けたやうに、いや彼男と縁を絶ての手を切れのと追つたつて、客を相手の廓女でもない以上は今が今、さう容易く切れるものでも無し、また一時遁れに切れたと言つて置いて實は切れない戀の裏道もあるンですなから、そ

ンな手緩い迂路をせずとも、もし妾を無事に生けて置くからには、切れも切れないも相手の無いやうにした上で、また何とか更めて妾に打明けた相談さへして下さりやア、ほ、ほ、ほ、妾も人情の端くれで、戀の相手を斬った敵に其日から好いて身を任す筈はなし、逆に引かれて嬉しい道理はないんですが、思ひきつて冴えた腕の凄さには憎さが餘つて、また妙な氣の出るもんですさ、世間普通の女は、どうか知りませんが、妾はこんな氣の性質で、ぴりりしやりりとした情愛一點張の濡男よりは、ちと凄味のある色悪の方が、ほ、ほ、ほ、しかし、今のやうに、たゞ縁を絶ての手を切れのと言はれては、たとひ殺されても意地づくの鐵火お梅ことし十九で、花が散つても實が落ちてても惜しくは無いんですよ、持つて生れた性根が横に生えて居ながら善にも悪にも踏み掛けた道は眞直な一文字、たとひ位牌間男はするとも生きた男は二人と持たない覺悟、なるほど面白い尋常の阿魔でもないと思つて少しは買

手のありさうなもんですねエ、ほ、ほ、ほ、

さらぬも男の生命取に生れたるお梅、こゝぞと一入の艶を含んで鬼をも挫ぐ色香の露、鐵も石も丹花の唇端に翻さんばかりの辯を振うて綾なせば、まして突くの斬るのと狂ひ廻つても根は戀の奴の上汐勘太、今までの無念と怨恨は忽ち吹き拂はれて、心の底に残りし未練むらくと湧き出でつゝ、いつしか魂魄脱殻の五體に魔藥を注され、たゞほつとして暫時そのまゝに差俯きしが、やがてまた振り上げたる面體に何をか思ひ切つたる凄色を帯びぬ、

「いや、よく分つた、もう何にも言はねエ、今の一言、もし嘘でなきやア其、その證據を見せろ」

「證據、別に今これといふ證據は、しかし、こりやア妾の口から言うては濟まないんですが、それほど深い怨恨を含んで附け覗へば、どうせ一度は知れる筈の邸宅と定

紋、そつと今こゝで打ち明しますから、その邸宅の近所に忍んで、此家へ通ふ時はいづれ夜の事、その提灯の定紋を目印に、ほゝゝゝともかく今まで遁けて隠れて居た妾が自分の在家を知らして、其上また世間へ憚る身分を持つた男の、邸宅と目印をいふからは勘太さん、まさか、これまでのやうに、憎うは無いでせうねエ」
いはれて勘太いよく夢うつゝの體、氣も心も失うて首を縮め聲を潜め、今更ら四邊を見廻しながら、

「兎も角、その邸宅は何處だ、定紋は何だ」

「ほゝゝゝ、まア現金な人、もう聲が變つて來たよ、實は高くいはれませんがね、上二番町の角屋敷で定紋は九曜の星、去年の夏の月見舟で、ちらと風體を見なすつた筈、こゝまで言へば隠すに足らないこつてすが冥加のため、名前だけは」

「いや、怖ろしいほど小面の憎いところに、また言ふに言はれねエ情のある女だ、乃

公も男の腕、その上に野暮な根を掘つて深くは聞かぬエ、上二番町の角屋敷で目印の定紋が九曜星、それで充分だ」

「しかし、この近處で遣られては困りますよ、たゞの町人風情と違つて旗本の家柄、定めて後日の詮議が厳しいでせうから」

「萬事、そこに如才があるもんか、屋敷から一町四面の外ぢやア手を下さねエ」

お梅さらに摺り寄つて勘太の耳に口、何をか私語きし後、ぐいと其手を握りつめて抛ぐるが如くに振り放せば、腕の附際より切れて飛ぶかと思はれ、五體の骨も筋も一時に溶けし心地、目鼻を齧めて總身を震はせながら、やうく残り惜しげに立出でしが、軒をかすめて人を斬る利鎌に似たりし宵の新月も、いつしか雲に隠れて冬の夜の闇の中、霜を踏んで歸り行く勘太の姿を透しつゝ、そのまゝ家内に入れば、一室の襖を開けて現はれ出でたる上州勝、はや大脇差の目釘を濕して立出でんとする勢ひ、お

梅みるより駆け寄って聲を潜めながら、

「おツかけて、やるには及びません、あゝして置けば萬事この妾が手の内ですから、なまなか急いで、もし萬一、そんな事もありますまいが勝負は時の運で萬々一、今こゝで打ち漏らしては猶更ら却って後日の面倒になりますから」

「いや、それは其事としても彼奴、どうせ生かして置く奴でねエから、幸ひ今夜の闇、こんな機会を外しちやア」

「いえ、大丈夫、たとひ外さうが放さうが大丈夫、彼奴の力や腕では逆も切れない鏈鎖を繋いで置きましたから」

「鏈鎖、鏈鎖たア全體どんな事かア知らねエが、みす／＼今こゝで彼奴を見遁しちやア、それこそ却って後日の面倒だ、しかも勘太は此の上州勝が引受けましたと受合ツた言葉の手前もある奴だから、どうしても今夜のうち、なアに追ッかけて背後か

ら一太刀、ばツさりと浴せりやア済むんだ、手間ア入らねエ」

「そりやア手間も暇も入りますまいが、まア兎も角、妾のいふ事を聞いて下さい、この梅が鏈鎖で繋いだといへば袋の鼠ですよ、なにも今夜に限って遣らないでも、どうせ遅いか早いか無い生命、も少し用に立て、後、ゆる／＼片付けた方が萬事の便利ですから、今夜のところは妾に預けて下さい、まだ／＼彼奴には生かして置く理由が」

「む、妙な事をいふね、彼奴が徘徊いて居ちやア萬事の妨げになるから一時も早くといふんで、わざ／＼逆手を使つて今夜こゝへ呼び寄せたんぢやアねエか、それに今更、妾に預けてくれの、まだ生かして置いてエのと、全體どうする決心だ」

「ほ、／＼、まア氣を落付けて、ゆつ／＼と聞いて下さい、實はね、妾も最初は其氣で呼んだんですが、陰で思つて居たとは違つて案外の腰拔、あんまり脆く手の中へ

轉け込んて來ましたから、なアに此分ぢやア急ぐにも及ばないし、いつでも遣らうと思へば遣られる奴を、さう俄に急いで手を下すよりは、幸ひ、その脆いところに付け込んて思ふ存分、此方の用に立てた上、入らない時に自滅さす方が却つて宜からうと思ひましたから」

「彼奴の脆く落ちて來た様子は襖一重の隣室で聞いて居たが、つまり何の用に立てるんだ」

「そこですよ、妾に對してこそ根が心の底に呵しい未練があるから、あんなに脆く落ち込んて來ましたがね、彼奴も男の數の一疋、外へ向ツちやア少しは腕も立ち脛も利くんですから、兎も角その腕と脛とを使つた後」

「さア、その腕を何處へ使ふんだ」

「つまり、上二番町の屋敷の方ですよ」

「おい、何を言ふんだ、そいつアいけねエ、たとひ大丈夫に勝負は見えて居ても一旦この上州勝が受合つた以上」

「ほ、ほ、ほ、少し言ひ難いんですが、ぢやア萬事、すツかり打明けて仕舞ひませう、實はね、隣室で聞いて居なすつた通り、位牌間男はしても生きた男二人は持たないと、さんざ氣を揉まして遠卷の色仕掛に落とし込んた上、上二番町の角屋敷で目印の提灯が九曜の紋所と吹き込んたのは、全く彼情人の事を言つたのぢやないんですよ、同じ邸宅から出るにしても、世間を憚つて此家へ來るに定紋の提灯を持つて出る筈は無し、また狼狽へた夜の目で見ても親御は年輩も違つてるし、どうせ間違へば、まことに濟まないことですが、例の兄様に當りませう、そこで彼奴が怨恨の一念に飛び込んて、しかも屋敷の一町四面より外では遣れないやうに釘を打つて置いたんですから」

「いや、どうも、うまく仕組んだ、狂言に寸隙もねエところは實に驚いて感心するが、つまり過日、あれほど乃公が事を分けて止めた術と同じこつちやアねエか、そりやア酷いぜ、あんまりだぜ、第一、首尾よく行けば宜いが、もし萬々一、彼女が半死にでもなつて引ッ捕へられた上、苦しまぎれに白狀でもして見なせエ、それこそ大變だぜ、藪蛇ぐらゐの驚愕ぢやア治まらねエ」

「いえ其邊の覺悟も、及ばずながら、あるんですから、こゝは妾に委して置いて下さい、もし萬々一、露顯した曉は、妾が一人の生命で濟む事、ほゝゝゝ、上州勝といふ人が、なぞと見苦しい餘計の口は聞きませんから」

「いやさ、承知の上の乗合舟だ、難船した曉に乃公が一人、助かりたくもねエがね、あんまり策謀過ぎて酷いと思ふからさ、どうも其處になると、とても乃公なンざア叶はねエ」

「ほゝゝゝ、かうはいふもんの、相手が立派な侍ですもの、あの上汐が返り討になるのは十の七八、知れてありますさ、しかし生かして置きたい人間を殺すんぢやアなくツて、どうせ殺す奴を此方の手も濡らさず他人の手にかけるんですから、たゞ萬に一つ首尾よく出来た時、少しは寢覺が悪いやうですが、これとても、どうせ一度は深いか浅いか怨まれずに濟まない覺悟の人、その兄様が達者で無事に居られた日には、いつまで手も足も出ませんもの、五十町を歩くも百町を歩くも同じ道、もし首尾よく行けば誰が闇討にしたとも分らず其まゝ、二千石の世取は此方のもの、もし返り討になつたところで、いづれ生けて置かれぬ奴、こゝは妾の運だめし、どツちが遣ツても遣られても身の爲になりますからねエ、まア日を眠ツて居て下さいな、ほゝゝゝ」

「ほゝゝぢやアねエぜ、十九の春の花の中から、その怖ろしい度胸が湧いて吹き出る

ンだもの、毒を喰へば皿までだ、同じ事なら何萬石といふ大名の御家騒動に使ツて見てエな、いくら家柄でも内福でも二千石の旗本にやア惜しいくれエの凄味だ、はは、、、しかし惚れ込んだ戀の慾目を見積ツちやア、國司大名の價値はあるだらうよ」

「あれ、今更、妙な弱身を付け込んで妾を」

「不意に妙な弱身にでも付け込まなきやアとても勝たれねエ女だもの、第一その美貌ぢやア善悪ともに何をしても十が百に對ふからね、また笥ぢやアねエが、一皮々々剥けば剥くほど實が出て来て味は美エが喰ひ過ぎると忽ち毒だよ、は、、、その毒を知りつゝ喰ふ奴があるから、事だ」

「ほ、、、今この妾の前に居る人だツて、さのみ藥になりもしますまいよ」

「なるほど、さういやア、毒の廻り過ぎる方が勝かね、は、、、」

其五

絲目の切れし戀の奴、ふはくと春の上風に欺されて闇雲に飛び乗りつゝ、前後の差別もなく人知れず寢刃を磨ぎ澄し、おのれ男女と覘ひし血眼も今は一人の敵に對うて集めし力瘤、しかも只一時の怨恨を晴らすばかりに狂ひ廻りし身が、その怨恨を晴らして後の娛樂さへあれば、一入さらに勢ひ込んで荒れたる阿修羅の如く、白晝は夜具うちかぶつて枕に就けど、胸に燃ゆる燈火ちらほらと夕暮の空より兩國を立出でつゝ、いつしか闇に紛れて上二番町の角屋敷、九曜の紋所のうツたる提灯こそ戀の仇敵、ござんなれ今にも出るかく足場を取つて脇差の目釘を濕しながら、夜なく露を浴び霜を踏んで四邊のそくと徘徊ひぬ、

神ならぬ身の斯くとも知らぬ大林主水、當年二十八歳、よしや聊か家の器に缺けた

りとも傳來の二千石そのまゝの世取に生れながら、わけて文武の名聞ありしかば我身
 また別に千石を賜つて將軍家の小姓に召出され、しかも内外の寵遇めでたく行末は親
 の甲斐守にも立勝るべき出世ぞと、一家一門は更なり友朋輩にも羨るゝほどの男振、
 まして舍弟の小三郎が八幡きかぬ氣の一徹とは違うて萬事に優しく、勤務の餘暇には
 和歌を嗜みて風流の道にも其名を得しかば、今夜も幸ひ近き師の許に連歌の會合あり
 とて、槍一筋に馬の手綱を絞る登城の姿には引替へて唯一人の下郎を召連れたるまゝ、
 提灯の火に路を照らして我屋敷を出立でぬ、
 不俱戴天の親の仇敵を覘ふよりも、さらに一倍の腕を擦つて血眼に待ちかけたる上汐
 の勘太、それと見るや否、忽ち大地に身を伏して蛇の如く鎌首を擡けつゝ、窺へば、
 立出でしは正しく上二番町の角屋敷、提灯の紋所は慥に九曜の星、をりしも雨氣を含
 んで曇り勝なる闇の中より透せば、おほろながら年若き色白の優男、何をか下郎に私

語きつゝ、をりく打笑うて歩み行く背後より、油斷大敵こゝにありと電光石火の勢
 ひ、たつた一打とは思ひしが、さて今更に思ひ出せば去年の夏、月見舟の酔を覘うて
 不意を打ち込んでさへ、ふしぎや五體を手鞠の如く宙に抛けられたる手のうち、もし
 仕損じては一大事と、およそ二町あまりは足音を忍ばせ中腰となつて追ひ行きしが、
 横町より飛び出でて俄に吼え立てし犬の聲に、忽ち振り向いて下郎の提灯を高く差上
 げさせ、じろりと此方の闇を睨み返せし眼中、勘太おもはず首を縮めて駒寄石の蔭よ
 り窺へば、そのまゝ其處なる邸宅の内へ入りぬ、
 さては三町以内の近處に用事あつてのこと、されど近ければ夜は更けても必ず歸るべ
 き筈、しかも下郎一人の外は俄に供の數を増すべき筈もなし、幸ひ今にも降り出でん
 かと思ふ今夜の空、雪にもせよ雨にもせよ、せめて一降さつと降れかし、手に傘さし
 かけて足に下駄は我に取つての味方も同然、おのれ一度は遁したりとて、その歸途を

そのまゝ、無事に見送るべきか、この程より十日の夜なく、一町四面の間に躓く小石の
 数まで知りぬいたる用意の男、總身の勢ひ込んで思はぬ不意に飛び懸らば、たとひ其
 場に息の根は絶たずとも、いづれ此世に生けては置かぬ筈、今かくと門前の闇を縫
 うて彼方此方に潜みつゝ、片唾を呑んで待ちかけぬ、
 さらぬも淋しき屋敷町の夜は次第に更け渡りて、肌を劈く北風の音絶えしほどもな
 く、墨すり流せし如き空より、ちらくちらくと降り来る雪に歸途を急ぎけん、夜中の大門
 さつと俄に開いて立出でし提灯の火影、すはやと身を固めて窺へば、紋所の違ひしま
 ま彼方へ立去る後より、また打連れて二人の提灯、また續いて三四人、いづれも目印
 の九曜ならねば、さては今夜この屋敷に何事か會合の客ありてと思ふ折しも、近けれ
 ばにや更に後れて出でしは正しく其人、しかも續く人なく道伴もなし、
 數ふれば以上八人の客、一時に續いて立出でし其中より、たゞ一人、しばし時を經

て後れしのみか、方角さへ違うて道伴もなきは運の窮極、しかも近ければとて一人さ
 らに急ぎつゝ、ちらくちらくと降り来る向ふ雪に主従もろとも脇目も觸らぬ背後は得たる寸
 隙と、上汐の勘太そのまゝ、追ひ行きて七八間の此方より脇差すつと抜き放ちながら、
 片手に大地の砂を擲んで俄に近づけば、足音に驚いて思はず振り返る面上へ、ぱつと
 抛けたる目潰もろとも躍りかゝつて斬り込めば、やつと外されて空を打ちしが死物狂
 ひの一念、また忽ち翻つて打ち込む鋒銚にあはれ不意の眼眩んで肩口さつと斬られ
 ながらも流石は武藝者、ぬき打に斬り拂うたる一刀は勘太が頬を斜めに削つて、その
 まゝ、飛鳥の如く飛び退きつゝ、大喝一聲

「曲物ツ」

勘太は二の太刀うち込む勢ひもなく、狼狽へて飛び込み來りし下郎提灯きり落すや
 否、見返りもせず宙を飛んで一散に遁け出せしが、ふしぎや追ひ來る敵も無ければ五

町あまりの此方に一息ほつと吐きながら、闇に探れば頬より鼻にかけて一文字に斬り上げられたる體、幸ひ僅の刀鋒にかすつて疵は浅けれど、ぬらくと血糊の流れ出づるに今更ら驚いて用意の腹帯取外しつゝ、幾重となく巻き付けて其上より人も怪しまぬ冬の夜の頬かぶり、をりしも脚下の溝に手を差入れて掬ひあけたる水に咽喉を濕ぼし、またもや一散に走せ出でしが、麴町を駈け抜けて平河天神の門前を過ぎながら、何をか思ひけん、そのまゝ横町に走せ入つてお梅が門の戸を軽く叩きぬ、今夜は思ふ情人も来まさねば、戀に並べん枕もなしと、宵より門の戸を閉ぢて、母もろとも母屋の方に打臥せしお梅、夜は更けたれど、まだ寝もやらぬ耳に我名を呼ばれて、はつと思ひながら、

「誰、どなたです」

「さういふなアお梅さんぢやアねエか、兩國だ、兩國だ、兩國から來たんだ、ちよい

と開けてくんな、手間は取らさねエ、すぐ歸るんだから」

聲は正しく上汐の勘太と、お梅おもはず枕を欹て、眉を擧めしが、何事ぞと驚いて起きんとする母を、そつと手に押し止めて襦袢のまゝに立出でつゝ、さらに油斷の體もななく、わざと行燈の火を暗くして門口の戸を内より一二寸、やうく指頭の入るや入らぬほどに引き開けながら、斜めに身を倚せて聲の漏るゝばかりに窺ひぬ、

「勘太さん、どうして今ごろ」

いひつゝ、目を閉ぢて耳を欹つれば何とやら息の根の急しき體、もしやと思つて其まゝ、猶も聲を潜め、

「開けても宜いんですがね、今夜ア例の屋敷から用があつて、家來の爺さんが來て、奥に泊つて居るから、なるべく、そつと小さな聲で」

「えッ、屋敷から人が來て泊つてる、そいつア大變だ、實ア今やつて來たんだよ」

「やツたとは、あの一件をかね」

「さうよ、この暗闇だから生死の段は知らねエがな、たしかに一本まるツたから、どうせ無事ぢやアあるめエ、しかし乃公も少々やられたよ」

「あれ、まア素早いこツたね、まさか今夜とは夢にも、おや、さうかい、さぞ骨が折れたらう、しかし、さうして來られるくらゐぢやア、さのみ深い御返禮でも無いと見えるね」

「さうよ、心配するほどぢやアねエ、このくれエの事ア覺悟の前だ」

「いよくそれなら、さア早く勘太さん一時も早く、まごくしてると今に屋敷から人が來るかも知れないよ、一人こゝに泊ツて居るんだから」

「おツと承知だ、しかし相手が相手で、やられた乃公の疵が面だから、當分このまゝ江戸にやア居られねエ、幸ひ鴻の臺の市川在に兄弟分が」

「どこでも宜いから、一時も早く飛ンで下さい、そして其處から、そツと大丈夫な使者でも」

「よし、ぢやア直ぐ行くから、其方からも、相手の生死を」

「加才がありますもんかね、居どころさへ分りやア妾が、人頼みせずとも妾が、忍んで行くから」

「ぢやア萬事それまで」

「随分、氣を付けてね、折角こゝまで漕ぎ付けたのだから、港口で舟を割りたくないさ」

「今こゝで割ツて堪るもんか、うまく風と汐合を見て、そのうち、宜いかね」

「宜いともさ、かうなりやアいよく氣が据ツて居るから、安心して下さい」

お梅そのまゝ、戸口に身を摺り寄せて立聞けば、まだ降り積まぬ雪解けの霜を踏んで

徒跣に駆け出す夜陰の足音、もの凄く次第に遠くなりて近く身に染む夜更の寒さ、おもはず總身を震はせながら、にこりと人知れぬ微笑を含んで臥房へ立戻れば、母は起き直ッて行燈の影に坐しぬ、

「あれ、おツ母さん、寝ないんですか、この寒いに、風を引きますよ」
いふ顔じつと見詰めて母は兩眼に涙を含みながら、

「お梅、今のは、誰だえ」

「あれですか、ありやア兩國の、兩國の上州勝の親分が、ちよいと近處まで用があツて来たからといふんで」

「さうかい、私はまた、和女が、蛇のやうに嫌ッて居た、あの上汐の勘太さんの聲かと思ツたよ、しかし、まさか其人が、今ごろ此家へ来る筈は無し、よし知ッて来て、和女が、ひそくと心易う談話する筈は無し、ねエ」

流石のお梅も何とやら心に咎めて答へも得せず、たゞほ、と笑ひながら、そのまゝ、無言に枕を引寄せて寝ねんとする手首、ぐツと母は固く握りて目に持つ涙を拂ひながら、
「これお梅、和女、何事も、この母が知らないと思ッてるのかね、今のは慥に勘太さんだらう、全體あの兩國の店も横山町の家も、急に仕舞ッて此方へ来たのは、なるほど、今のお方の御身分を思ッて、また一事には却ッて母子が幸福とはいふもの、その實はあの勘太さんが蒼蠅いからで無いかね、それに和女、その勘太さんと、いつの間に、まア」

「ほ、おツ母さん、何です、急に呵しな事を、なるほど、今のは其人に相違ないんですが、誰が馬鹿らしい、あんな嫌な男に、實は過日、川崎の大師へ泊りがけで御参詣なすつた日ね、あの時、上州勝の親分と妾が相談して、いッそ打明した方が宜からうといふんで、わざわざ此家へ呼んだ上、互に糾れ合つた今までの萬事は

水に流してくれと、よく事を分けて會得するやうに談話をして置いたから、つい、あゝして来るんですよ、しかし、おッ母さんに知らしては、却ッて心配なさるだらうと思ッて、わざと」

「いえ、それは其事としても、和女、また別に、あの上州勝の親分と、何か、怖ろしい事を」

「別に、何も」

「お隠しでない、知ッて居ますよ、過日の夜、親分が和女の伯父と言ッて、お目通りした其明の朝、お歸りになッた後で、あの奥の離亭で互に、人知れず相談して居た事を、この母が何心なく立聞きした時の驚愕、ぞツと總身に水を浴びたやうで、おもはず口にお念佛を唱へたくらる、何故まア和女は、しかし、自分が腹を痛めて産んだ娘ぢやなし、藁の上から貰ッて育てたといふで無し、たゞ死んだ良人が若い時分

和女の、お父様に恩があるからと言ッて、わざと牢屋の中から連れて來た和女、それから以來、いろく世話になッてばかり居る和女の事だから、親とはいふもの、その母は、どれほど氣を措いて遠慮して居るか、そんな事は兎も角、お梅、いかに性質とはいひながら、あんまり和女、第一、罰が當るよ、冥加といふものが盡きて、不吉な事をいふが、何時また二度、もとの牢屋へ這入るやうな身の末になるか、だから、どうか今のうちに心を入れ替へて、御身分といひ御氣立といひ男振といひ、和女、あれほど結構な方が世の中に二人とあるものかね、たとひ日陰の身でも、何でも、かうして安樂に暮して居る以上、何が不足で、そんな怖ろしい、大膽な、勿體ない氣が出るんだらう、いや二千石を丸取にするの、やれ一足飛に玉の輿だのと、もし私のいふ事が聞かれぬなら、どうか今こゝで更めて母子の縁を切ッて貰ひたい、實は和女の行末を見るのが嫌だから、旅の空へでも出て、諸國の神様や佛様の

靈場靈跡を拜んで廻りたい心、折角かうして丸三年越の母子で居たが、よく縁がないんだらう、死んだ良人が和女を此世へ出しさへすりやア、あれで昔の義理も濟んだ筈、また今こゝで私が出て往つても、これまで世話にこそなれ、和女に不足いふべきところは更に無いのだから、和女もまた強ち私に對して不幸といふではなし、今更ら水臭い事をいふやうだが、いはゞ雙方、互に出ず入らず、ねエお梅」

いひつゝ、顔を反けて襦衣の袖に涙を拭ひしが、果は其まゝ、其處に打伏して泣き沈みぬ、

五人十人の大の男が、血吐嘔に轉け廻つて狂ひ死に死するとも、持つて生れし心の一物ぐつと身を固めて、さらに顔色さへ變へざるほどのお梅ながら、かりにも現在の母が呆れて諫めかねたる上、この身の末に怖れて縁を切らんといふのみか、せめての罪亡ほしに諸國の靈場靈跡を拜み廻らんと泣き伏す體、流石に辛く悲しく腸を責めて總

身を絞らるゝ心地、おもはず目に持つ涙の露を宿しながら、脱ぎ捨てたる夜着を其ま
ま母の脊に打着せて小膝を進めつゝ、

「おツ母さん、萬事この妾が悪いんですから、今更ら一言も申譯の仕やうは御坐いま
センが、いろいろ其間には、また言ふに言はれぬ理由があつて、つまり自分一人の
強慾非道でも無いんですから、こゝは能く噛み分けて聞いて戴きたいのです、なる
ほど、眞實の父は本所割下水の御家人中で音に響いた悪黨と聞いて居ますし、また
妾は十五の小腕で一人の伯母を斬りかけて牢屋へ投り込まれたほどですから、もし
血が性を引くもんなら、自然の性質、少しは世間の優しい女子に違つたところはあ
るかも知れませんが、最終から兩親が無事に揃つて何の不自由もなく立派に育ちさ
へすれば、まさか、こんな氣にもなりますまいと思ひますの、それが生れ落ちてか
ら兩親の顔は知らず、家は跡形もなく潰れて親類縁者に構うてくれる人は無し、い

は、落し物の拾はれ次第、いろく他人の手に渡って、小供心にも、さまざまの悲しい苦しい辛い世間を漂って來ました上、おもはず廻り會うた伯母の邪慳が却って他人の百層倍、その怨恨が間違ひの源因となり、やうく闇黒から出して戴いた間もなく、おツ母さん一人となつて、あの伊勢屋からは朝夕に厳しい矢の催促で責め立てられ、母子が差當つて身の振方はなし、それこれの苦しまぎれに、また上汐の勘太といふやうな男に覘はれ、とても叶はない浮世の不幸、あの底から浮び出すには、是非ともあれだけの事をせなければねエ、また兩國の水茶屋を出してからも、辛い義理の柵にかけられて蒼蠅く附き纏はれた果に無理無體な喰物になるよりはと思つて、一方の楯に頼んだのが上州勝の親分、ほつと一息する間に、やうく今の方が出來て、それから此家までの道行を考へますと、さのみ自分から求めて悪い事ばかりしたやうにも思ひませンのみか、今あの方に對つても、實は、おツ母さん、

お恥づかしい談話ですが、妾は心底から、生涯この人に見捨てられまい、また飽くまで放したくないと思つたところで、悲しい事には身分の相違、たとひ此ま、行末ながく縁があるにしても、どうせ世間晴れての夫婦になれるでは無し、また一つには、あの方も次男といふ御身分で、まづ分家は萬一の事、いづれ他家へ御養子にお出でなさる筈、さうなれば、いよくこの縁が遂げられまいと、いろく途方に暮れて、さまざま思案に盡きた果、實は自分の慾もありませんが、生命、たとひ生命にかけても添ひ遂げたいといふ一念から、可愛い其人の身の事まで、つい妾が心一つで脊負つて立つ覺悟、それには幸ひの上州勝といふ後へは退かぬ男氣を見込んで後楯とした上、おツ母さん、少しは察して下さいませ、妾だつて何も自分が、すき好んで寢覺の悪い事をしたくはないんですが、自然に斯ういふ理由になつて來た今更、とても死なずば止まぬといふは此こつてすよ、もし眞實、妾の心の底を汲み取

ツてくれる人があつたら、憎いよりも可哀さうだと言ふでせう、なるほど、また世間の目からは、今年やうく十九の妾が、大それた二千石の總領を押し退けて次男に生れた自分の戀男を世取にしようとは、いかにも怖ろしいと、をりく我ながら呆れ事御坐いますが、もしこれが成就した曉は、つまり、おツ母さんも、その娘が二千石取の嫁、しかしながら、世間のいふ通り不義の富貴は汚ららしいと仰しやる上、また妾のやうな女を娘といふのが、お心に叶ひませんなら、なるほど今こゝで母子の縁を切りませう、切りませうがね、おツ母さん、どうか生涯お一人で安樂に暮せるだけの用意、そのお金の出来るまで待って下さいな、それも五日か十日、遅くて半月のうち、そのお金で知らない旅の空へなぞ出ずとも、この江戸中で下女一人を使つて、つまるところは、傍で見えて居て御苦勞なされるのが氣の毒ばかりか、また萬々の時、御迷惑のかゝるやうな事があつても濟まず、妾が心は唯それがため

に切る縁ですから、どうか其お金を請取つて戴きたいの、實は、かうとは言はずに近いうち、どツか別に氣樂な御隠居住家をと申して居ました折柄、幸ひと申しては濟みませんが、ねエおツ母さん」

「いやもう、善いにも悪いにも、萬事が飛び放れて立勝つて居る和女だもの、足らぬ私のやうな女が、いくら何と言つても、どうせ聞く筈はないと承知して居ながら、やはり親心、實は、あんまり、しかし今さう事を分けて聞いた上は、なるほど和女の言ふ通りにしませう、しかし、お梅や、世の中は物の七八分が頂上、九分に手が届いて十分過ぎては却つて舊の一に返るといふから、たとひ今更ら退くに退かれぬ理由があつても、根は生命かけて思ふお方の爲にもせよ、勢ひに任して萬事を仕過ぎないやうにね、口でこそ母子の縁を切るの絶つものといふもの、産んで生れた親身の間とは違つて、義理ある中は却つて格別一倍、ましての深い縁があつたればこそ、

それを何の今更、別れたい事があるものかね、しかし互に氣立の違つて生れついたのが浮世を隔てる涙の種で、私のために和女も入らぬ氣兼ねして胸を痛め、また私も和女の事を傍で見居ては逆ものこと、身が縮まるほどの苦勞」

「いえ、おツ母さん、よく分りました、もし萬一、妾が思ふ通り、あの方を美事に二千石の主人に仕上げた暁は、どうか舊の母子になつて戴きますが、まアそれまでは、あかの他人の梅、夢にも氣にかけず無い昔と諦めて、唯その身を大切に煩はないやう、行末ながく安樂に、をりく思ひ出しても下さいますな、もしや夜長の寢覺勝にでも、お心に浮んだ時は、あの不孝女め、世に一人の義理ある母親を賤しい金錢づくで叩き出した憎い女と思召して、勿體ないが、お便りもして下さらないのが却つて互の身のため、このまゝ、不孝な娘を捨て、最初から無いものとするか、また不意に二千石の嫁の親になるか、こゝ兩三年のうち、早ければ半歳か一年のうち」

其六

奥州南部の牧の荒馬を打つて放せしが如く、宵闇に春情の附きし飼犬が綱ふりきつて飛び出せしが如く、さては手負野猪の牙を鳴らして眞一文字に覘ふが如く、元來が色仕掛に本性を引き抜いて魂魄脱殻の五體を脚下より叩きあけたれば、風のまに〜どこまで飛んで行くかと思ひしかど、馴れし河岸際の相對喧嘩ならばいざ知らず、かりにもそれだけの覺えあるべき二千石の總領、まして我身の器量に千石の別知を取るほどの腕前、いかな無法者も首尾よくて生命からく遁け出すか、もし狼狽ふれば忽ち其場に胴體兩斷となつて寂滅往生、つまりは他人の手をかりて眼前の蠅を拂ひしばかりと、高を括つて嘲笑ひしに、その上汐の勘太か夜更け人定まりて後に門の戸を叩きしのみか、生死は知らねど確に一本まるりしとて、おのれも薄疵を負ひながら、い

ざこれより鴻の臺の市川まで飛ばんとて立去りし體に、流石のお梅おもはず舌を巻いて、規ひ定めぬ下手な鐵砲玉と白痴が向ひし眞向の一念ほど怖ろしきものは無しと、今更に打驚きぬ、

されど闇に紛れて一本まるりしとは、おのれ確に思へども現在の敵は正しく如何なりしか、淺疵か深疵か、もし思ひの外の功名に急所を突いて息の根を止めしか、もとより不惹を規うて斬り込みし闇討、何者の仕業とも知るよしなければ、定めて屋敷の騒動に當分あの情人も來られまじ、せめて要助なりとも逢うて餘所ながら委細を聞きたや、こゝぞ我身の運の吉凶、たとひ生命に別條なくとも、その疵が生涯の不具となるか、但しは療治に長引いて餘病を惹起すか、いづれにしても死すれば論のない事、よし生きて残るとも病身となれば次男の世取、おもひの外に手軽く本望を達せしやらと、微笑を含んで小首を傾けながらもまた一つ、あの上汐の勘太めが其場で殺されも

せず、やうく薄疵を負うて無事に遁け出せしのみか、わづかに江戸を離れし鴻の臺の市川より目を見張りながら、おのれの疵も痕なく詮議も次第に消えし頃、のこくと面おし拭うて立戻らば南無三寶、以前に増して此後は猶更ら募る煩惱の犬根性、おもひやられて蒼蠅けれども、さりとして今更ら彼奴の巢を發いて身を叩き出さば、却つて毛を吹いて疵を求むる世の諺、さてはまた新たに一思案ぞと眉を顰むる折しも、門の戸がらりと引き開けて飛び込み來りしは例の要助、お梅おもはず微笑もろともに出で迎へつゝ、さらに何氣なき體、

「あれ要助さん、いつにないこと、白晝のお供ですか、きつと前夜は入らつしやる筈と、おそくまで夜を更かして待つて居ましたに、いくら自分の事で無いつたつて人の氣も知らない、ちらく降り出した雪で餘計な忠義立して、お風を召すなぞと、お止め申したんでせう、憎らしい、覺えて居なさいよ、戀の邪魔する奴は何とやら

いふ唄がありますよ、ほ、ほ、ほ、

いへども要助さらに笑ひもせず、いつにない眞面目の體、そのまゝ立寄りて四邊を見廻し聲を潜めながら、

「お梅さん、何事も知らないたアいふもの、あんまり暢氣過ぎちやア濟まないぜ、實はね、前夜から、お屋敷に大變な取込が出来て當分まアお越しになる譯にやア行くまいよ」

「ほ、ほ、ほ、しらぐしい顔をして、また人を」

「いや、戯談ちやアない、全くの事だ、實は今月中、事に寄ると來月も來られないから、兎も角まつ其事を知らせ旁、二月分の手當を持ッて往ッてやれと仰しやるので、その使者に來たのさ、しかし、あの取込最中でも、すぐとこゝまで、お氣の付くたア驚いたよ、いや、付くやうにする女の腕前が猶更ら驚くね、は、は、は、おツと

笑ッちやちア濟まないこツた」

「それ御覽なさい、今の笑ッた聲が本音で、あとは皆、ほ、ほ、ほ、地獄へ行く前に舌を抜かれますよ、御用心々々々」

「いや、さう疑ッてる以上は證據を見せる、この要助なンざア年が年中、自分の身體を目の仇敵のやうにして働いたッて三分の一も取れねエ金を、たッた二月の笑渦の露で何の苦もなく、あゝ同じ人間なら女に生れたかッたねエ、そら切餅一俵二十五兩だ」

いひつゝ、懷中を探ッてお梅の前へ恭しく差出せば、お梅おもはず目を見開きながら肩うち擧めて膝を進めつゝ、

「あの要助さん、本當に、何か、お取込の事があッて、二月も入らッしやらないンですか、全體どんな理由で」

「お屋敷の面目にも關はる事、第一お役柄がお役柄だから、高い聲でもいはれないがね、前夜、御總領様が、つい近處の和歌の先生へ行かれて、お歸りになる途中、何者とも知れず闇の中から不意に飛び出して、斬り込んだ奴があつたのさ、勿論、御生命に別條は無いやうだが、随分手酷かつたと見えて、早速御病氣届が出た上で、醫者の外は一切、お見舞に來た御親類方さへ通さないといふ始末さ、其時お供に立ツた朋輩に聞いたが、何でも背後から無言で飛び込んだから、はつと振り向く途端に、ぱつと砂を目潰しにして其まゝ一太刀だつたさうだ、しかし、曲者も慥に胸邊から上の方へ遣られた様子で、萬事わざと内々にして居るが實アなか／＼の大騒ぎさ、しかし親御様が御役柄、すぐ八方へ寸隙もなく手が廻つたから、いづれ其うち分るだらう、今更ら返らない事をいふやうだが、もしこれが御次男様なら、たとひ不意の目潰しに逢つても大丈夫、それこそ曲者は忽ち其場で眞ツ二つ、どんな素早い奴で

も遁れない筈だが、御總領様は少々お優しい方で、残念な事をしたといふ評判だ、しかし右の理由だから御舍弟の身として當分は逆も、お越しになる事が出来まいよ」

きくや否、お梅は俄に驚いたる氣色、前に差置ける二十五兩を我知らず膝もて押退けながら、起たんとする要助の袖を捉へて聲を潜めつゝ、

「そりやア大變な事が出来ましたねエ、まだお目にかゝつた事は御坐いませんが、かうして厚い御恩を蒙る方の現在お兄様、餘所ながら御伺ひ申し上げる事も出来ない身分ですが、せめて、何とかして、ねエ要助さん、冥加のため、妾の念の届く工風は、ありますまいかね」

「今もいふ通り、どういふもんか、御親類方のお見舞さへ通さないくらゐだから、逆も、しかし、その志さへありやア、それで宜いさ、また御次男様へでも、そつと申

し上げて置くから」

「いえ、それでは妾の氣が濟みませんから、一生後生のお願ひですが要助さん、そんな御取込最中に御兄弟を此家へは恐れ入りますから、人の氣の付かない夕方に妾を連れて、御門前の脇からでも、そつと、お目に止まるやう取計らって下さいな、お、梅、来たかと言、承れば、それで宜いんですから、これが五日十日の事なら何ですが、二月といへば一年の六割ですもの」

「これやア驚いた、御總領様の事を心配して騒ぐのかと思やア、いつの間か自分の田へ水を引入れて仕舞つて、お梅さんどうしたもんだね、このごろは大分、そつちが上氣せて来たやうだぜ、御次男様の火の手が強いかと思へば、どうして、こゝが火元で御坐いだ、とんでもない、平生でさへ其段は厳しくつて、聊か考へのあるこつたから今暫時、梅の事は夢にも屋敷の者に漏らすなと固く止められて居るんだ

もの、まして斯んな取込最中この要助が御門前へ手引して、ちよいと其處までなぞと欺してお連れ申して見ろ、それこそ例の手のうちで、要助の笠の臺が飛んで仕舞つて南無三寶が後の祭禮だ、しかし、それほどに思ふなら、こゝ半月も過ぎて後、少し邸宅の治つた潮合を見て、なアに二月といふもんの、實のところ、まさか極めた通りの御辛抱がなるまいから、御總領の御様子次第で、いつ何時、こりや要助、平河の天神様へ參詣せうか、なぞと仰しやるかも知れないさ、は、は、は、とかく大象を繋ぐ力で引き寄せるんだもの、いくら名高い武藝者だつて堪るものか」

「ほ、は、は、さう何も、妾を悪くばかり言はなくて、いけないなら不可ないで宜しいから、いッそ、ついでに、此お金も持つて歸つて貰ひませう」

「や、そいつア困るよ、あの取込最中に折角の思召、わざとそれがために来た要助が、どうして持つて歸れるもんかね、そんな人困らせの無理をいはねエで、請取るも

「ンなら綺麗に請取った上、あらためて其うちの幾等か、この要助に下さるなら兎も角、別の談話で理由が分つてるが」

「ほ、ほ、ほ、妙なところで御遠慮のない事を、しかし、半分あけませうか」

「えッ、半分、半分といやア十二兩二分だぜ」

「少なけりやア二十兩でも」

「いよく薄氣味が悪い、をりよく美顔にも似合はない、ぱつとした調子外れの思ひ切つた事をいはれるから、どうも萬事が」

「しかし要助さんの爲にも大切の御主人なら、また妾の爲にも大切の方、同じところから出るお金ですもの、いくらか餘つてる方を手薄い方へ廻すに何も不思議はありません、とつて置きなさいよ、いつか戴いた二十五兩を要助に遣はしましたなぞと、そんな餘計な吝臭い口を聞く梅では御坐いませんよ、男の癖に氣の小さい、よく

五尺の身體を振つて歩けますねエ、夜中に寝てる枕頭へ盜賊が這入つて千兩箱の二個三個も置き忘れて往つたら、どうする決心です、確乎なさいよ要助さん、さア面倒だから二十五兩そのまゝ持つて往つて、すきな事をして御覽なさい、そして第一お金といふものは、いつまで嫌に人の懐中へ暖まつて居るもんでないから、また宜い加減の時に放してやらないと、それに懲りて後には一切寄り付かなくなりますよ、ほ、ほ、」

「何だか煙に巻かれて仕舞つたやうだが、ぢやア切餅一俵そのまゝ貰つても宜いですかね、あとで要助さん、過日のを返して下さいなぞと言つちやア困りますよ、本當でせうね、寢言にも金々と呻つてる要助を見込んで、慰み半分に遊ぶんぢやアないでせうな、しかし何だか變だ、その二十五兩に手をかけるや否、あつと驚くやうな注文が出やアしますまいね、とかく金に就いちやア念に念を押して置かないと間

違ひの基だ、はゝゝゝ、ぢやア恐れながら御免蒙ッて戴きますよ」

「時に要助さん」

「そら出た、そゝそれだから前に、あれほど」

「ほゝゝゝ、嘘ですよ、しかし、お兄様の御容態、もし知れたら、ちよいと妾まで内通して下さいよ、その御容態次第で二月のところが一ヶ月になるか、また半月で入らツしやるやら、ねエ要助さん」

「いや、金の冥加でも精々氣を付けて、油断なく、一時も早く、お越しになるやう」
「きつと、必ず、お頼み申しますよ、ほゝゝゝ」

其七

去年の夏より人知れず磨ぎ澄ましたる戀の怨恨の亂れ焼、この寢刃を片相手に浴びせ

たるまゝ、生死の境は知らねども確に手徹、たとひ生命は生き残るとも再び物の用に
は立つまじと、おのれが疵を包んで其夜のうちに江戸を飛び出し、鴻の臺の此方、市
川の片邊り、むかし餘波の名所を今も眞間の繼橋に住めば誰いふとなく繼橋の權藏と
て土地の名を得し男、上汐の勘太がためには兄分の由縁あれば、これを訪うて暫し浮
世を忍ぶ假の宿としながら、聊か仔細あつて少し手剛い奴を仕留めて來た身、この面
の疵の癒ゆるまで頼むといへば、權藏ことし五十六の半白なれど其道の場數者、敵手
の名も事の起因も一切すべて問はず、たゞ首肯いて心易き外科醫を市川の町より呼び
寄せつゝ、日夜しきりに療治介抱せしかば、左の頬より鼻を斜めに割いて右の目許に
斬り上げた體、わづかに鋒鉞かすりて長けれど幸ひ思ひの外に深からねば、はや十日
あまりの後は縫ひし絲目を抜いて只その後の養生に日を送りつゝも、心は江戸の空
に馳せて人知れず冬の夜長を啣ちぬ、

相對喧嘩に馴れし男と男、さては素町人とは違うて、正しく天下の直參一人、定めて詮議に寸隙もなく厳しければ、この面の目印の消ゆるまでは四方の網、一寸も出られまじとは覺悟しながら、さてお梅の門の戸を叩きし時、もし人傳に聞かば忍んで行かんといひし一言に、あはれ勘太は心も空、そつと人を走らせて委細を告げ知らせつ、花の姿の門戸に訪ひ来る色香、今日かくと首を伸ばして待ち詫びぬ、手古奈の神社に夕陽照り添うて、見渡す枯野に人の影もなく、市川の町を隔て、流れ急ぐ真帆片帆、はや總寧寺の入相の鐘の音、眞間の佛殿に讀經の聲さへ幽に響きつ、繼橋の葦の枯葉に北風吹き渡りて、さはくと昔を私語く聲かと思はる、夕まぐれ、誰かは知らず權藏が門口に立停まりて、暫し四邊を見廻せしが、やがて家内に入りて會釋しながら音太き中音に、

「繼橋の親分は此家と聞いて伺つたもんですが、近ごろ江戸から疵養生に來て居る筈

の客人へ、ちと用事あつて參つたもんです、平河の天神横町と取次いで下せエ、お目にかゝつた上で萬事、委しう」

をりしも上汐の勘太は湯殿より立出でながら、此方の一室に心地よけの肱を枕として身を横たへしが、平河の天神横町と聞くや否、おもはず起き直れば何處やらに聞き覺えの聲、そのまゝ首を伸ばして障子の隙間より一目見てまた忽ち驚きぬ、さては上州勝わざく何として此家へは尋ね來りしぞ、男と男との意地の張合、互に刃の笑を含んで別れしまゝ、今更ら我身のための吉か凶か、彼奴が意中の黒白いかにと思ひしが、生憎主人の權藏も居らざれば、みすく卑怯に遁け隠れすべき場合でなし、さすべき奴でもなし、しかも待ちわびし平河の天神横町と吐せし一言、仔細あらんと性根を据ゑて、そのまゝぬつと立出でながら、まだ消えやらぬ疵の痕に一入の凄みを帯びつゝ、「む、誰かと思つたに思ひも寄らねエ上州勝、ちよいと淀んだ此の上汐の流れささま

で、わざく何の用で来たんだ」

いふ顔を上州勝じろりと見上げて冷かに笑ひながら、

「なるほど、あぶねエところへ極印を打たれたもんだ、その鋒鋦が五分か六分か深く這入りやア其場で忽ち、しかし運の宜い男だ、おい勘太、運が宜いといやア外でもねエ、今日は色女からの使者に來た上州勝、いつもの野暮な喧嘩面ア廢して酒の一盃も出せ、は、は、は、とところで立談話もなるめエ、おぬしの借り切った部屋ア何處だ」

何とやら打ち解けたる目色の様子、さらくとせし言葉の調子、かりにも旅の風體まで、人を規うて押し掛け來りし白刃の匂ひ見えねば、勘太おもはず眉を擧めながら、おのれの一室に引入れて、下婢の小女郎が汲み出す茶よりも、はや薄闇き家のうち點せし行燈の火を掻き立てつ、今更らに上州勝の面體じろくと打守りぬ、

「おい上州勝、慌て、急くでもねエが、口と手は早いが宜い、今日わざく江戸から此處へ來たなア何の用だ、春たア言ッても、寒中の今ごろ、まさか北風に吹かれて真間と鴻の臺の見物ぢアあるめエ、平河の天神横町から頼まれて來たといふが、ことし十九の女に鼻頭で追ひ使はれる男でも無からう」

「は、は、は、ところが今日は北風に吹かれて真間と鴻の臺の見物かたぐ、ことし十九の女に鼻頭で追ひ使はれて來たんだ」

「む、そいつアわざく御苦勞千萬だ、しかし用事の筋は何だな」

「外でもねエ、あの名物お梅、あらためて此の上州勝に呉れねエか、眞實の事を言やア、上二番町の角屋敷で九躍の紋所、其人に逢ッて貰ふべきの筈の女だが、こゝア上汐、おぬしを男に立て、いふんだ、また本人も義理を立て、もし妾の身を思ッてくれるなら、今かういふところに勘太さんが居るから、是非とも一應は渡ッた上

にしてくれとの事さ、しかし上州勝は色にするでも戀にするでもねエ、いはゞ乃公が仲間へ這入ッて萬事の委細、巨細を一掴みに貰ひてエといふのさ、これも兩國の水茶屋を疊ンで、本人が姿を隠したまゝに濟ンだ時なら兎も角、ちらと聞きやア自分から在家を明して呼び寄せた上、何だか奴風が南瓜畑へ落ちたやうな乙に搦ンだ文句のあつた後、おぬしが随分、際どいところまで働いたと聞き及ンだから、念のため上州勝が、今日わざ／＼挨拶に來たのさ」

「ふむン、ぢやア彼女、またこの上汐の勘太を手玉に使やがツたな、いやさ、一度ならず二度までも、この乃公を嚙ンで吐き出しやアがツたな、しかも其お使ひがらの上州勝たア畜生、これやア阿魔一人の藝ぢやアあるめエ、うぬ等アそれで宜からうが、あらたに受けた上汐の勘太が此の面の極印、どうして取消す料簡だ、まづ其事から聞きてエ」

「おい／＼、あらたに受けた面の極印を、さう大きな聲で振り廻しちやア却ッて身の爲になるめエ、今が江戸で詮議の厳しい最中だ」

「その厳しい兇狀持にやア誰がしたんだ、どいつの細工だ」

「は、は、は、此方ぢやア眞實さうでもねエが、もし其方で玉に使はれたと思やア、使はれた後で眞赤になツての腹立文句は止すが宜からう、却ッて折角の男振に器量の下るこツた、だから上汐、こゝは一番さツぱりと、野暮な委細を捨て、萬事この乃公に預けてくれ、しかし、たゞは預からねエ、預かつた證文の代りに、あらためて彼お梅と兄弟の盃さゝら、惚れた膨れたア昔の夢さ、根に呵しい氣さへなけりやア考へて見ろ、少しやア世間の女より、小面の憎い事もあらうが、さのみ腹ばかり立つ女でもねエ、事によると兄弟に持つて十人や二十人の太エ野郎よりア却ッて面白いかも知れねエぞ、結句、いくら怨恨があつても無念があつても、殺されても

化けて出る料簡ぢやア無効だ、男は當ツて碎ける浪の岩、ぱツと音高く飛沫の立つ時にやア勢ひ込んで何奴此奴の容赦はねエが、また晴れて静まった時は底まで透き通るところの生命だ、田舎の腐れ婆アが葬式金を取られたやうに、いつまで執念深く取付くやアとねと、と仔細らしく言ツちやア却ツて氣に觸るかも知れねエが、どうかカノ木の根を立ててくれ、實ア忘れもしめエ、この二月を相圖に本人のお梅は兎も角、上汐の勘太と上州勝たア互に男づくの決闘をする筈の約束だ、しかし其事も一切、源泉が澄めば末流の濁らねエ理窟で、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、と溜飲が下ツて一時に胸の開くやうな挨拶を聞きてエ

「なるほど、そこまで段々と事を割ツて聞きやア、この上汐もまた、まんざら耳の穴の潰れた男でもねエが、全體、何のために自分が心の嫌でもねエ相手の武士を斬ツてくれと頼んで、すきでもねエこの上汐に情ツたらしい目色を寄せたか、また其邊

に呵しな雲がか、ツて居るやうな、まづ乃公よりも其方の日本晴れを見てエもんだな」

「いや、無理のねエところだ、しかし現在、その相手は無事だ、蚤に喰はれたほどの疵もねエといふこつた」

「は、は、は、何といふんだ、蚤に喰はれた痕もねエ、おい勝、今こゝで妙に呵しう出損ツちやア根も葉も飛ぶぜ、先刻この面を見るや否や、現在その口から江戸の詮議が厳しい最中と」

「なるほど、それやアそれに違はねエが、お梅の相手は正に無事だ、おぬしの斬ツたなア全く人違ひだ」

「えッ、上二番町の角屋敷で九曜の星の紋所」

「さうよ、上二番町の角屋敷で九曜の星の紋所だが、ありやア兄だ、お梅が相手の兄

だ、どツちも揃ツた美男で色白の優男、闇の中の提灯ぐれエぢやア氣の早ツた目で間違ツたも無理はねエが、上汐、罪な事をしたぜ、夢にも御存じのねエ兄御で二千石の世取、しかも自分の器量で別に千石を取るほどの人だ、最初からその間違を言ツちやア折角おぬしの働きを無にして弱身に附け込む難題に當るから、この事だけは後で明してくれといふ本人の注文が感心だ、また自分が手を下さなくツても現在その身の恩になツてる旦那を殺さうとしたのみか、間違ツて兄様を痛めたなア猶更後悔、しかし今更ら打明して言ふに言はれぬ苦しい心のうち、せめて今の旦那に飽くまで情を立て抜いて貞女を盡すにやア、第一に上汐、おぬしの心の底から今までの萬事さツぱりと忘れて仕舞ツてほしいといふのさ、その代り其方にさへ不承知が無くば更めて兄妹の盃を取交し、行末長く互に助け合ツて、きれいに交際ひたいといふんだが、あけて今年やうく十九の女としちやア随分、出来過ぎてるくれエ

だぜ、おぬしの義妹に持ツても、さのみ恥づかしくはあるめエ、どうだ上汐」
 「いや、きけば聞くほど、思やア思ふほど、右から出て左から出て、乃公なんざア及ばねエ、とても叶はねエ女だ、今更ら弱い音を吹くやうだが全く降参だ」
 「は、は、は、さう俄に息を引くには當らねエが、彼女が凄いとこ、まだあるぜ、乃公に斯う言ツたよ、もし此上なほ妾が悪く出れば、後日の面倒を今のうちに絶つ考へで、兎も角も兄妹の盃を取交した上、金の五十兩か七十兩も勘太さんに渡して、このごろの厳しい詮議といひ第一その面の證據が危険いから、これで一年か半歳の間、氣を抜くために上方へでも高飛びする方が宜からうと萬事を深切ごかしに叩き出した東海道へ、乃公を追ツかけさせて、途中で、ばツさり、渡した金は元へと逆戻り、どうだ上汐、その上また追手の乃公を品川から此方へ生けて入れねエ工夫があるとき、これが今年十九で蟲も殺さねエ花の色香と言ツちやア、誰が眞實に受け

るだらう」

「いやはや、降参々々、きくほど身の毛が立って来らア、よく今まで生膽を取られて三盃酸でもしられねエこつた」

「しかし上汐、安心するが宜い、それほど凄腕があるから、また冴えた事をいふよ、たとひ江戸中どれほど詮議が厳しくつても、妾の義兄とした以上は、市中の中央に大胡坐をかゝして指も差させねエ工夫が考へてあるとき、もしあの分で二十四五から三十といふ聲がかゝつた曉は、どんな女になるだらう」

「いよく、人間ぢやアねエ、化物だな、はゝゝゝゝゝ」

其八

上州勝は年輩といひ分別といひ、心の底に動かぬ度胸あつて氣立は水に流せし如く、

どこやらに貫目を帯びて其身の境涯に似合はざる辯舌さわやかに寸隙もなく、善惡ともに自己が踏み掛けし足を中途に退くべき男ならねば、萬事うちあけて力と頼み行末の身の楯にもなれど、あの上汐の勘太は心も浅く脚下も軽き奴、時に取つての風車に廻して指頭の便利にはなりながら、元來の下種根性に生れて動ともすれば前後も辨へず狼狽へ騒ぐ體、もしや藥石の投しやう利き過ぎては却つて大事の基、如何なる事をするやも雲行の知れぬ男ぞと、流石のお梅おもはず眉を擡めて小首を傾けしが、はたと我膝を打つて忽ち一思案を浮び出しぬ、

されば其の一思案を携へて上州勝わざ／＼眞間の隠れ家を訪ひつゝ、おのが工夫も取交せて前後左右より腹の底を抉りまはせば、上汐の勘太あつと呆れて感に堪へつゝ、二年越の火水となつて躍り上りし無念も怨恨も一時に忘れて消え果てしのみか、たゞ人傳に果敢なき口端の義兄といふ一字を聞き及びし連城の珠玉の如く有難く押戴いて

飢ゑたる猿の餌拾ひし心地に這ひ廻りつゝ、喜びし體を、お梅きいて思はず吹き出しながら、いづれ一度は心づいて忽然また猛り狂ふべき奴、いつまでも其まゝには濟まねども、まづ當分は天下泰平、まことに目出たき男ぞと打笑ひぬ、

世間には内分ながら實は不意に事起りし屋敷の取込あれば、こゝ暫時、およそ二月ばかりは來られまじと聞きし時、お梅わざと打驚いて氣も失ふばかりに見えしが、人知れぬ心の一物、ほゝと笑うて、たゞその生死の境を一時も早く知りたしとのみ思ひつゝ、さまざまに思案を廻らせしかど、もとより走せて行かるゝ身でも無く日を定めて招かるゝ人にもあらねば、我のみ胸を碎いて番町の空を打眺めぬ、

二月といひし十二日目の夜ふけし後、例の要助をも召連れず只一人、大林小三郎そつと忍び來りて門の戸を叩けば、何心なく立出でしお梅、はつと打驚いて我にもあらず

聲を立つれば、手もて制しながら奥の離亭に打通りて、そのまゝ床の柱に身を持たせつゝ、中音に小諺の一節、更らに憂愁の色を含める體もなければ、お梅いよく怪しみて顰むる眉もろとも、さも殊勝氣に身を縮めて彼の要助より聞きし委細を問へば、小三郎おもはず忍び音に笑ひながら、

「餘の事とは違つて、さぞ驚いたであらうな」

「まだ蔭ながらも、御意を得ましたことは御坐いませんが、たゞ、あまりの事で、それにもまた、二月もお越し遊ばされないと承りましたので猶更、もしこれがせめて御門前までなり伺へまする身で御坐いますればと」

「いや無理もない、しかし、なか／＼の取込であつての、とても今夜かうして來らるゝとは思はなかつたが、まづ兎も角、實は、どう致して居るか、はゝゝゝ、」

「定めて、いろ／＼、わけて御兄弟のこと、猶更ら御心配と存じまして、及ばぬ蔭で

ばかり、つきましては其後の御様子、お怪我の程は、如何で御坐いますか、妾風情が承りましたところで、何のお役にも立ちませながら、また氣が」

「何をいふにも、曲者が闇の中から飛び出して、おもはぬ不意を斬り込んだから、いかに兄が平生の心得あつても叶はぬところ、右の肩口より胸板へかけて斜めに一字の大疵、事に依ると一命にも及ぶであらうか、は、は、は、とは世間の手前、實はな、寒中夜蔭の事といひ心易い近處へまるる途中で、肌着胴着とりませ五枚も衣類を重ねて居られたのみか、曲者は元來さのみ手のない奴と見えて踏み込んで打込む太刀筋に寸隙あつて受けた兄が流石にさつと身を退いたから、なアに右の肩口より胸板へかけて、一文字も實は着類ばかり、肌には蚯蚓膨も致さんが、最初に砂の目潰しを抛けられた爲、たゞ抜打の鋒銚のみで取遁したは残念の至り、なれど梅、父が役儀の手前、第一、兄は將軍家に近づく身分といふに、もしや萬々一、人の意趣

意恨など受けるやうでは實に恐れ入る理由、それはこのため、わざと大業に觸れ廻し、親類の見舞も通さず、いはゞ敵に仕留めたりといふ安心の油断を興へて、其間に内々の詮議いたしたところ、別段これといふ同輩の怨恨妬嫉でもなく、また其時の太刀筋から抜打の刃風を喰つて一散に遁け伸びたところを考へると、これは名もない身分の低い奴が人違ひで飛び掛つた事と、まづ大略こゝに取極つての、は、は、は、しかし今もいふ通りの理由で、世間の手前、現在その舍弟の身として輕々しう外出も出来ず、その曲者が萬々一、むづかしい同輩などの意趣意恨と定まらば、まづ早くて二月の取込、こと面倒に及んだらば半年一年も、は、は、は、本人の兄が達者で一室に閉ぢ籠りながら、出入の醫者を招いて抹茶などの體、それで屋敷が騒いで第一に舍弟の顔が平氣では困るといふ始末、まるで茶番狂言をするやうに呵しかつたぞ、は、は、は、」

いひつゝ、思ひ出して猶更ら高く笑へば、お梅も口に袖おしあて、ほゝと笑聲を漏しながら、こればかりは流石の女も盆の窪の毛を一掴み二十日鼠に喰ひ取られたる心地して人知れぬ胸のうち、あつと呆れて張り詰めし氣も一時に落ち入りつゝ、いよく小三郎が笑ひ出せば、ますく我身を嘲らるゝ如く、果ては坐を起つて廁に行く風情しながら、おもはず溜息ほつと吐いて舌鼓をうちぬ、

なくて幸ひ、あつて害する上汐の勘太が生命一個、そのまゝ取つて捨つるも惜しき事と、わざとく呼び寄せて戀の色香に狂はしたる上、こゝまで謀りし胸の一物、しかも生死は知らねど確に一本まるりしとして自己も疵を負ひしのみか、此方の屋敷は忽ち騒いで俄に醫者の外には出入無用の大事といひ、現在その同胞の我戀人さへ二月は取込まれて來られまじとの通知、たとひ大地を打つ槌は外るゝとも、かくまで組んで仕上

けたる現在の萬事、よもやと思ひしに思ひの外なる空を衝いて、覘ひし人は兎の毛の末の疵もなく、つまりは謀り謀りて倒しまに謀られたる我身、幸ひ知らねばこそ、もしこれが互に知り合つて顔見合さばと、お梅おもはず自己が影を見返りて今更ら冬の脊に汗を流しながら、一念かくと思ひ立てば骨を粉にして皮肉を割かるゝ際までも花の顔そのまゝ、人知れぬ不敵の魂魄を押し隠して更に撓まぬ天生、なほも其の後の工夫に心を碎いて戀の枕の暇には、夜なく玉の腕に羽二重肌の胸を擦りて何をか案じ出しぬ、

たゞ名のみばかりと思ひし春も、いつしか長閑なる空の霞に整うて、花の色、鳥の音野山の景色、さては家の内に漏るゝ日陰も何とやら、浮立つ人の心を誘ひ顔なる折しも、かの要助たゞ一人、ぶらりと入り來りて、しかもいつになき酒氣を帯びたる體、

お梅みるより微笑を浮かべながら、

「あら要助さん、どこで召上ったか今日は大變な御機嫌です事、まさか、お供ぢやア御坐いますまいねエ」

「は、は、は、要助だつて、稀にやア少し飲む口に飲ませてやらないと、平生は目の敵のやうに使つてる五體の骨節が承知しないから、今日は幸ひ一日暇で、なアに今朝お友達の方々と神奈川へ遠騎をなすつて、人間の脛は夕方まで、まづ御不用に相成つたといふ譯さ、ところで拙者も白馬に鞭つて一鞍せめてやらうと思つたが、いやまて、過日、大枚の金子を貰つて虎の子のやうにして其うちの幾何か、は、は、は、また吝臭いと笑はれるかア知らないが、いはゞその虎の子の糞ほどで、澄み切つた上馬を五合ばかり、ぐつと引ツかけた勢ひで、さア彼女といふところでも無し、ついでなく、馴れた道順で此家へ舞ひ込んて來ましたが、こりやア主人の不在を覘つ

て手生の花を、どう斯うする不埒な理由ぢやアない、つまり年中いつでも常咲きの其色香だけ、ちよいと見て嗅ぎに來たんだが、お梅さん、いくら見ても嗅いでも俄に瘦せるもんでなし、ねエ、しかし要助が酒に酔つて、かやうな事を申しましたな、んざア眞平だよ、は、は、は、」

「あれまア、妙なもんですね、どんな人でも御酒を召上ると、すぐ調子が變つて面白くなりすから」

「む、ぢやアこの要助も、いささか調子が變つて來ましたかね、御覽なすつて面白くなりしましたかね」

「まア何だか嬉しさうですもの、誰も嫌で飲む人は無いでせうからね、ほ、は、は、は、妾でも、もし飲めるなら飲んで見たいと思ふ時がありますよ、だから殿方は猶更だんなに快樂だかねエ、要助さん」

「しかし要助なンざア、快樂で飲むより、むしろくしやの自棄ッ腹で飲む時の方が多いから、いはゞ自分で自分の身體を持て餘した人足、生きてる間は兎も角、かうして動きますが、さて死んだ時の始末が厄介だ、どうか骨の拾ひ手を今のうちに探して置きたいもンだが、時にお梅さん、妙な事をいふやうで濟まないこツてすが、お小使の端た錢で、この要助の骨を買って下さいませんか、別段お役にやア立ちますまいが、もし萬一、外から買ッて仕舞はれちやア、却ッてお爲に悪からうかと、ねエは、ゝゝゝ、うまれ素性、もとの御身分は知らねエが、兩國で水茶屋以來の裏表は、ぐツと睨ンで今日まで何にも言はず、この腹の底に納めてある身體だ、お梅さん、高くは言ひませんよ、たツた三百兩、是非とも買ッて戴きたい、たとひ世間の見掛けは一文奴でも、此家ぢやア、三百兩は確にある筈だ、その三百兩が今一時に面倒なら、野暮は言はねエ、百兩づつに割ッて三月、勿論、實ア今日かぎりで大林

の暇ア取ツた身體だ、その三百兩で田舎の田地を買ツた上、せめて老の行末だけでも人間らしい正直に送りてエ決心で來やした、つまり冥加の宜い金だから、この要助が本音を吹いて舊の名をいはねエ前、其方も叩きやア何か出るか知れねエ穴の蓋を取られねエ前、こゝア互に善い人同士で早く談話を纏めたいもンだ、今更ら淺黄頭巾を脱いで正體を現はし合ツたところで詰らねエからな、は、ゝゝゝ、しかし、お梅さん、随分と物凄腕だね、その腕ぢやア全く取れるよ、乃公が受合ツとくから」

「ほゝゝゝ、要助さん、少し惜しい事をしましたね、ちと早マツて頭巾を脱いだから、とても三百兩は覺束ない、まづ半値で百五十兩なら、この梅が黙ッて五十兩づつの三月拂ひに買ひませうよ、其方で妾を見抜いた目が早かつたか、妾が其方を見抜いた目が早かつたか、よく考へて御覽なさい、ちよいと物の凡例をいへば、あの兩國の

水茶屋を閉した時、十五兩といふ株を其まゝ上げたのも、實は此奴たゞの鼠でないと思つたからさ、高が年に二兩か三兩の端た給金で吹けば飛ぶやうな軽い生命を繫ぐ渡り奴へ、まだ馴染もないものが何の爲に十五兩を一時に呉れたのか、慾の皮を引張り直して考へるが宜い、その後は猶更、つい過日も切餅二俵ころりと抛け出したのは言はず語らず金轡といふことは互の胸にある筈だに、今更ら事新らしう聞き直つて、たゞの女を嚇すやうな浅い文句を止めて、呉れなら呉れろと自分の身體相應の事を言ひなさい、それを三百兩に買へとは少々お高いばかりか客種を見違つて居るからさ、ね、何も元の名前や手前味噌の臭みを嗅ぎたくないんですから、今もいふ通り黙つて三月拂ひの百五十兩、それで承知すれば宜し、もし嫌なら嫌で御勝手次第、鏢一文も出ませんよ、ほゝゝ、早まつて惜しい事をしたと言つたのはね、同じ強請をするなら、やはり大林小三郎の家來要助で、無事に旦那の手首を握つてる

時にしてこそ、妾の急所を突いて痛いところに針も届くが、渡り奴の暇を取つた以上は、ほゝゝゝ、わざと誰の穴を探して誰に言ふ決心だエ、そのくらゐの呼吸も知れないやうぢやア、どうせ數の分つた前身で、立派に場數を経て來た本惡黨か何ぞのやうに、淺黄頭巾を脱ぐも脱がないもあるもんかね、黙つて百五十兩といふのは妾のお慈悲さ、つまり今かうなつた最初の橋渡しといふ人でも無いが、まづ取持役に出來たやうなものだから、あけるのさ、さもなくして誰が、馬鹿々々しい、ほゝゝゝゝ」

「ぢやア黙つて百五十兩」といひてエが、三百兩と切り出したから一文も引かねエ、出さなきやア出さして見せるから覺悟しろ、人の妾となつて年の割にやア氣の付く女と平生から思つて居りやアこそ、お別れに三百兩というたんだ、もし今まで吝臭工事でもあつて見ろ、生涯その身體に付纏つて絞れるだけ絞りあける乃公だ、要助

たア大林で三年の年期奉公に住み込んだ名だ、實ア此江戸で三百六十餘大名の部屋へや、部屋を廻り歩いて銀張勝負の元締までして来た鯨の與五郎といふもんだ、ちと仔細あつて三年越の浮世を忍ぶため、わざと世間へ目立たぬ旗本の次男へ奉公したが、あらためて今日から元の鯨だ、ところで今いひかけた三百兩、出掛けの駄賃の去年の秋から勘定へ入れて置いた金と、以上これだけ並べて置きやアそれで宜いんだ、取るか取らねエかア近日の腕並だ、随分、凄味をかけて待ッてるい」

「いつ何時でも勝手次第、妾の腕は妾が持つてるから、しかし妙なもんで、おい、後から蒼蠅い奴の出て来る事ねエ」

毒

婦 續 編

其 一

あたら蕾の花を現世からなる地獄の底に埋めて音もなく枯れ果たさん事、おもへば行末の色香も嘸やと惜しけれど、さて運命ならば何とせん、そのまゝ人知れぬ闇に枯れ果て、濟むべきを、なまなかに思ひも寄らぬ慈悲に救はれて又もや雨露の恵みに逢ひしお梅、そもく幸か不幸か、

さて縁あればこそ救ひ出されて其人を父とし母とせし身、風なくば花も狂はず枝も撓まず、よしや貧に件うて末は名もなきもの、妻になるとも、いと長閑けき心の春に咲き匂うて濟むべきを、またもや浮世に弄ばれて江戸隨一の兩國に不斷の花と唄はれ朝夕に萬人の戀に惱ませし名物お梅、そもく幸か不幸か、

姿は路傍の花、折るに委せねど見る目の色香、よしや一盛りの後には春や昔の老の涙に
 朽ち果るとも、兩國の名物これぞ餘波の露で濟むべきを、我から一人の戀に落ちて
 一夜の嵐に飛び行きつゝ、あらたに根を替へ土を替へて芽を吹き出さんとすれば、何
 とせん悪木のこほれ種、今更に眞實の父の名までも思ひ出されて物凄し、

人知れぬ怨恨の寢刃を磨いで我身を覘ひし上汐の勘太、高が絲目の切れし戀の奴風、
 さらに恐るゝに足らねども、あのまゝに捨て置かば白痴の一念いかなる業やせんかと、
 幸ひ、その白痴の一念に戀を引き寄せ色仕掛にかけつゝ、いはゞ小の敵をもて大の敵
 を亡ぼす心の一物、首尾よく打つてよし打たれてよし、どちらへ轉んでも我身のため
 と人知れぬ微笑を含みながら、上二番町の角屋敷より九曜の星の紋所と教へしに、現
 在おのれも淺傷の證據を受けて敵の生死は知らねど確に一本まゐりしと聞きしかば、

さてこそ思ひの外に手輕き大願成就、はや我戀は仕遂けたり聽て二千石も手のうちと
 咽喉を鳴らして喜びし甲斐もなく、そは故あつて世間を謀りし醫藥三昧、まことは無
 事息災に喰はれし蚤の痕もなしと聞きし時、流石のお梅も逆様に吊り上げて宙に抛け
 られたる心地、あつと呆れて顔色を失ひつゝ、一言もなし、
 しかも人知れぬ毒を吹き込んで闇の手に使ひし上汐の勘太は、鴻の臺の片邊り市川の
 此方、眞間の繼橋に世を忍んで朝夕に江戸の空を眺めつゝ、今にも這ひ出し來らば以
 前に勝りて我身に付き纏はん奴、さりとて相手の無事を楯に取つて眞正面より追ひ拂
 ふ事もならぬ我身ぞと、いよく眉を顰めて思案に暮れしが、怖ろしや男の生命取に
 生れて自然の殺し文句を得たる名物お梅、おもはず小膝を打つて浮び出せし一工夫を、
 そつと上州勝に打ち明けて不意に其巢を襲ひつゝ、たゞ口約束の證據もなき兄といふ
 一字を與へて五體の骨も筋も引き抜いたりとの返事、さても脆い奴がと胸撫で下しな

がら、ほつと思ふ間もあらせず忽ち脚下より淺黄頭巾を脱いで本性を現はせし例の要助、もとより尋常の鼠にてあるまじとは覺悟せしかど、時も時、折も折とて南無三寶、しかも此奴は外より用意の垣を乗り越えて來りし敵でなく、そもや兩國の水茶屋を一時に閉ぢし事の最初より人知れぬ我懷中に住んで穴の穴まで知り抜いたる奴、吹けば飛ぶべき男でさへ面倒なるに、まして二百六十餘大名の部屋々々を渡り歩いて銀張勝負に名を得たる鯨の與五郎、仔細ありて三年浮世を忍ぶ隠れ家に旗本の次男を主と頼みし中間奉公の今が退際、その行きがけの駄賃たつた三百兩と打ち出せし面魂、とても上汐の勘太風清が同じ川筋の水の泡ならねば、お梅も思はず雪を欺く額を低れ花の如き姿を潜めて溜息ほつと吐きながら、さて生れついたる天生の不敵さ、今更ら驚いて遁けも隠れも狼狽へもせず、ついでに此奴も嚙んで吐き出すか但しは呑んで我腹を肥さんと、短き春の夜は枕に夢も結ばず目を開いて天井の節穴を數へつゝ、胸の機關を

動かしぬ、

戀の縁、義理の縁、なさけの縁、事情ある縁、因果の縁、柵の縁、おもはぬ縁、おもふ縁、いづれ縁といへば他人と他人と互に手を取り合つて浮世さまぐ人いろく、退くに退かれぬ誓約あれども、これはまた戀でもなく義理でもなく、何の因果もなく末を結びし柵もなく、まして上州勝は善惡ともに四十の阪を越えて物の場數を経たる分別男、人を喰うて骨も残さぬお梅の毒々しさに舌を巻いて呆れながら影身に添うて我子の如くに思ひ、お梅また咲く花の色香は麗はしけれど根は悪木の芽を吹いて生れし女、もし仕損ぜば現在おのれの戀人をさへも地獄の道伴に連れて走らんとするほどの毒氣を含みながら上州勝を父の如くに思つて慕ひつゝ、同じ浮世の裏道にも互に胸うちあけて兎の毛の末も偽り欺かぬ心と心、そもくこれを何の縁とやいふべき、

うき世を忍ぶ戀の通ひ路には春の夜の朧月、なさけも一入ふかく立勝りて、しくものなしとは聞けど、今夜は其人も來ぬ門の戸口に立出でて、何心なく空うち眺むる折しも、そつと軽く脊を叩きしは上州勝、は、と笑ひながら、

「君こすば寢屋へは入らじ小むらさき、といふ風情かね、あんまり度を越して思ひ過ぎると脚下を踏み外して折角の舞臺から落ち込むぜ、落ち込んだところで溝か河原の淺瀬なら宜いが、俗にいふ奈落の底だ用心々々、は、は、は、」

「あれ、誰かと思ひましたに、ほ、ほ、ほ、實は今夜、もし今夜でなくば明日の朝でも、ちよいと出て御相談したい事が、しかし幸ひの事、まア家内へ」

「楨杆でも動かねエ女が、差迫ッて今夜だの明朝だのと、わざ／＼出かけて來てまで相談するたア何のこつたね、といつたところで此處ぢやアいけめエ、おほろ／＼と春の夜の、は、は、は、うそ月めが雲の間から面を出して見て居やアがる、冴えた秋よ

りも何となく薄氣味の悪い奴だよ、ぢやア兎も角、しかし御本尊様は」

「いえ今夜は、來ないんですから、ゆつくらと」

「さう言やア、まるで戀の空巢を覗ッて來る間夫のやうだな」

例の母屋を隔てし奥の一室に、樹間がくれの窓より燈火の影は漏れながら、四邊を憚る聲を潜めて互に膝を進めつゝ、人知れず打語りぬ、

「おもひ餘ッて彼人の來るのを待つでもねエに、ほんやり門口へ出てさ、そつと脊中を叩かれるまで氣の付かぬねエほど、全體、何を考へ込んで居たんだ、また今夜とか明朝とかいふ差迫ッた相談は何の相談だか、お人品にしちやア、ちと慌てたやうだな」

「なアに別に慌ても驚きもしませんがね、實は思ひも寄らないところから、また蒼蠅い奴が一人、湧いて出たので、どうしてやらうかと、それで」

「む、思ひがけねエところから、また蒼蠅エ奴たア、どんな蟲が這ひ出した」
 「外でも無い、あの要助めが」

「どこの要助だ、まさか、お供して来る要助ぢアあるめエ」

「ところが其、その要助ですよ、勿論、最初から尋常の奴では無いと考へた事が、いろくあつたのですがね、つまり屋敷奉公の渡り奴で、をりく金轡さへ掛けて置けば、さう深い毒も無からうし、また事に依れば此方の用にも使つて見ようと、實は高を括つて居ました、ところが、今日の晝ごろ、ふいと出て来て、いよく淺黄頭巾を脱いだ鹽梅、萬事あの上汐よりは輪數のか、ツた上手ですよ、第一、外から覗き込んで見當の外れた文句をいふ奴とは違つて何分、内から湧いて出た蟲で、人の知らない此方の臭味を嗅ぎ付けて居る奴、ちよいと羽箆で拂ひ落とすといふ理由には逆も、相手の氣ぢやア私の皮肉に喰ひ入った料簡、もし乃公を取るなら、汝の肉

も一緒に削つて取れと、いはないばかりの鼻息でね」

「そいつア案外だ、諺にいふ燈臺の下暗し、とんでもねエ脚下から厄介な奴が湧いたもんだ、なるほど、たゞの一度しか見ねエが、一文奴にしちやア少々、利き過ぎで、どツか面に一癖あると思つて居たよ、ところで、どういふ文句を並べた、此方の弱身に附け込んで、よくある奴だ主人の寸隙に一舐め、ちよいと舐めて見ようといふのかね」

「ほ、上汐の二の舞では無いが、もしそれなれば何でも無い事、片頬の笑渦で浮ぶ瀬もない深いところへ陥めてやりますがね、此奴なかく考へ込んだと見えて、とても叶はぬ色氣よりも慾氣の一點張、戀より金に轉んで来て、しかも大枚三百兩切餅たつた十二俵と吐した時の面憎さ、妾も未練氣なしに其場で切つて出て半金百五十兩を三月拂ひと打ち込んだところ、ぺろりと舌を出して上唇端を舐めながら、

この大江戸で二百六十餘大名の部屋々々を渡り歩いた銀張勝負の鯨の與五郎だ、男は南無も切實はしね金も出金も百両銀も眞平御免候へ、いづれまた更めて出直して来るからと、そのまゝ、きつと明日か明後日あたり今度は念入に用意して來ませうよ、あの勢では

「む、大名の部屋々々を渡り歩いた銀張勝負の鯨の與五郎、鯨與五、そいつア兼て聞いた奴だが、あの要助たア驚いた、しかし其奴が旗本の年期奉公、しかも人目に立たねエ部屋住の次男を選んで今まで面を被つて居たにやア理由があるだらう、こゝは一番、ぐツと逆様に急所の突きどころだ、まてく、幸ひ乃公の方に手筋があるから、ともかく彼奴が高飛もせず同じ江戸で世を忍んだ薄暗工證據を引き摺り出すまで、まア瓢箪で、ぬらりくらりと抜けるが宜い、まさか、本尊に取付いて一文にもならねエ此方の面を剥ぐやうな素い事もしめエから、結局、時と場合に依ツち

ア、そのくれエの悪黨が却つて扱ひ宜いもンさ」
 「その邊は大丈夫、妾も安心して居ますがね、もし萬一明日でも不意に鳴り込んて來て喚かれては少々、第一あんな脱らない奴ですから、どんな鐵槌と釘を持って來るかも知れないと思つて」

「なるほど、そこもあるが、最初に淺黄頭巾を脱いだ時、たゞ文句を並べたまゝで脚もかけず手に物も握らねエで歸つたなア、遁けも隠れもしねエ女を相手に今こゝで取つて押へても無効だ、痛い目をさして急に端た金を絞るよりやア、ゆるく遠巻の篝火に蒸して、ぐツすり一度に音もなく取らうといふ場數者の證據だから、喚いたり叫んだりもしめエ、またいくら間際に差迫つても手や足をかける氣遣ひもねエ、もし本尊が來合して居りやア、こそくと黙つて出してくれエのもんだ、そこは上州勝が馴れた眼で睨んだ通り、もし聞き及んだ鯨なら受合つたが、さて此方の弱味に

附け込で尋常の一文奴が鯨の名を被つて來たのぢやア危険だ、とかく本筋に到ら
 ねエ馳出野郎は癩走ツた聲ばかり張り上げて物を打ち毀すからな、しかし今きいた
 様子ぢやア、まさか質物でもあるめエから、もし明日にでも來れば、乃公が指圖に
 及ばねエこつた、そこア其場で吹き出る例の腕で何とか綾なして歸すが宜い、其間
 に一方で彼奴の急所を押へて來て、つまり三百兩と吐したところが、五十か百の金
 を叩きつけた上、あとは互の算盤珠に弾いて見て差引勘定なしさ、は、は、は、また
 事によれば兄といふ名を呉れて此方の用に立てるかね、この分ぢやア生涯に呵しな
 兄が三四十人も出来るだらう、いや御全盛なこつた、は、は、は、」
 「は、は、それは先づ其事として、今あの市川在に居る上汐の始末、どうしたもんで
 せう、おひく顔の疵が癒ツて來て、また無事に江戸へ歸ツた曉、本氣に妾と兄妹
 分にでもなツた心底で、しげく遠慮なく此處へ出入されてはねエ、もしあの時、

全く一刀でも斬り付けてあるんだと第一、詮議が厳しくツて足も踏み込めないで
 すが、何分、蚤に喰はれた痕もないといふ事で身分が身分ですから、却ツて其ま
 に捨て、置くほどの折柄」
 「いや、あの野郎の事は氣にかけるに及ばねエ、戀と慾とを捨てた以上、この上州勝
 が引受けたから、しかし、例の總領殿は運の宜い人だな、なか／＼當分、急には運
 ぶめエから、こゝはまづ兩三年を待ツて後、親御が隠居の間際に何とか一工夫する
 さ、實ア本尊も此方の手のうちで、とも／＼世取の兄を押退けてといふなら萬事、
 便利だがね、何分その本尊を知らず／＼抱き込んで立てようとする仕事だから、よ
 ほど面倒だよ、うまく打ち明けて乗ツ取らす工夫はねエかね、こりやア外から男の
 腕ぢやア出來ねエこつたが、枕を並べて夢うつゝの間に何とか、出來さうなもんだ
 な、は、は、しかし、根が兩方から惚れ込んだといひてエが、實ア此方の惚れ込み

やうが深くツて、もし、打ち明したところで見捨てられたら、折角これまでの戀も慾も一時に散るといふ恐れがあるんだらう、いや無理もねエが少々ばかり惜しいもんだ、その年で其美貌と其度胸を持って生れた名物お梅、同じ事なら男ッぶりの悪い大名の殿様を相手にしたかつたね」

「ほ、ほ、今更、をかしたことを、それほど妾が落ち込んでるやうに見えますか、まさか自分では、さうでもない料簡ですが」

「自分で分らねエところが何よりの證據だ、しかし、またよく考へ直すと、舊家でも内福でも高が二千石の旗本だから却ツて宜いんだらう、もしこれが何萬石といふ大名なら、忽ち内外の御家騒動、どのくれエ藩中の人を痛めて罪を作るかも知れねエからな、しかも大願成就した曉で、無事に身を終つた凡例なし、やはり悪黨も物の加減があつて、あんまり調子外れは結局の無効だ」

「悪黨々々と、何も、これが、さう悪黨な事では無からうと思ひますよ、外の種を植ゑ込んで其家を奪はうといふでは無し、同じ親の血を分けて先祖傳來の家に生れた兄と弟、たゞ世間普通の順を前後するばかりですもの、もし妾の心を汲んでくれる人があれば、悪黨といはれる前に一言、なるほど貞女の立過ぎだらうと言つて貰ひたい覺悟、ほ、ほ、」

「いや先刻も鯨の事について言ふ通り、本悪黨に物のぶち毀しなし、實ア其處があるから、この上州勝が頼まれて呑み込んだのさ、高が二千石の旗本、すツかり手に取つたところで世の中が其日から自由になるぢやアねエ、もし人間の慾でかゝれば、また事が早くツて利の積み上ツた山も見えるが、は、は、は、つまり乃公も戀の外で何かに惚れ込んだんだらうよ、たとひ自分の用で無くツても乗り掛けた船は沖まで一文字に漕ぎ出す男、これが乃公の病だ、意地かア知らねエが、擱んだ櫓柄は一生

「あれ要助さん、世間ぢやア要助さんでも無からうが、まア今まで呼び馴れたから妾の家では要助さん、ちよいと待ッて下さいよ、もう一枚で読み仕舞になるところ」

「春の日は短くもねエから、ゆっくりと読みなせエ、此方も別に用があるぢやアなし、どうせ今日一日を潰しに来たんだ、しかし念のために言ッて置くが、一日の日は潰しに来た男は潰しに来ねエから、そのお決心さまで、は、は、は、は、」

「あ、折角の男振、好き好んで丸潰しに潰したくも無いんですがね、あんまり慾の皮が張り過ぎると自分で裂けて仕舞ひますよ、ほ、ほ、ほ、張ッて鳴る筈の太鼓の皮ですら、張りやうが過ぎちやア一打で破れますもの、うてば響いて調子よく遠音のするには、よほどの加減ものさ、下手な細工ぢやア、ねエ要助さん」

「いや、御道理さまで御坐い」

そのまゝ、暫時また無言、互に見返りもせず春と春と向け合ひしが、鯨の與五郎が吹き

出す煙草の餘煙お梅の横顔をかすめて通る時、お梅は俄に聲を出して中音に読み始めぬ、

「え、何々浅黄頭巾も萌黄頭巾もあるものか、ぬぐなら脱ぐで丸裸になるが分相應の一文奴、どうした風の吹き廻しで飛んで来て、どこで覺えた歌祭文の土産だらう、乙な調子で咽喉が鳴り出す麥藁細工、霜夜に叫ぶ按摩の笛にもなるまいに、ほ、ほ、面白く、面白くことね、え、何々まだあるよ、鯨か鯨かは知らないが、どうせ料理にかッて人に喰はれる奴、針があッても毒があッても高が水に棲む魚鱗、網に曳かれて市に曝され組板に乗った時の庖丁鹽梅、それを思ッて今のうち、まだ水に縁のあるを幸ひ早く沖へ遁け出す方が宜からうにと書いてあるよ要助さん、こりやア何のこッてせう、ところで本も読み仕舞ったから、さア今日の用事を聞きませう」

「は、は、面白く、面白く本だね、それで仕舞ひか、さア其方の御用が濟めば此方の御用だ、

「ぢやア何日ごろといふんだな、まさか春を過ぎてからぢやアあるめエ」

「ほ、ほ、春や秋は兎も角、妾の考へる日限と少し違ひますよ」

「だから、いつか、その日を聞くのさ」

「そりやア念のため、今かういふものの、いつ何時、今夜や明日になるかも知れませ
ンが、まづこの様子では當分、ほ、ほ、實はね妾が、この梅が死際まで待ッてい
たゞきたいの」

「えツ、な、何といふんだ」

「いえさ、人の生命は分らないもので、今夜にも其時が来るかも知れませンが、まづ
此ごろの調子では何處に病氣も無いから世間の通り相場で人間五十年、ことし十九
で後が僅三十一年ですもの、しかし、死んでゆくものを引ッ捕へて談判も出来まい
といふンなら、その百五十兩を三十一年に割り付けて十二箇月の月拂ひにでも致し

ませうか、そこは御勝手次第、ほ、ほ、あんまり急くと却ッて互の損ですよ、ねエ
要助さん」

ほんと捨身に抛けて打ち出したるお梅の本音に、さすがの鯨も、あツと呆れて言句な
く今更ら暫時その顔を打守れば、名筆の畫より今こゝに脱け出でたるが如き自然の色
香いきくと張り切ッて澄み渡りし目元を何とやら俄に細めて一入の情らしく、雪の
富士額に水際たちし鬢の風情、丹花の唇端そのまゝ閉ぢて身を斜めに小膝を寄せなが
ら、のツしりと位を取ッて眠れるかと思はるゝ容體は、日本一の大廓に戀の水上の唄
はれし古昔の傾城も斯くやとばかり、これが處女より育ちて今年やうく十九の尋常
の女と思へば、よくくゝの毒婦に備ッて生れつゝいたる男の生命取、此女の身にも最愛
し可愛の戀があるかと、我を忘れて小首を傾けぬ、

「要助さん、お返事はね、三十一年このまゝ見送して待ッて下さいますか、但しは今

「こゝで、梅に手か足をかける決心ですか、どうせ取れない破れかぶれの自棄腹で、この家臺骨を叩きあける料簡ですか、また大名の部屋々々を渡り歩いて銀張勝負に名を得た男が三年わざと旗本の次男に年期奉公した理山仔細と、差引勘定なしにして下さるか、それとも今の手許にあるだけの十七兩三分、文句なしに取って帳消になさるか、ほゝゝゝ、春の日は長くツても今日の一日は半分以上も過ぎましたよ、ねエ要助さん」

「皮づつ飾る浮世の衣裳を脱いで本體を現はせば、さすがの男いよく呆れて含みし煙草の餘煙ふつと天井に吹き上げながら、

「これまで随分、いろんな太エ奴にも出逢ツたが、ことし十九の女で、その圖太い根性骨を見たなア今が初めてだ、煮え切らねエ半熟の上ツ皮料理ぢやア箸も取る男でねエが、あんまり駄立が面白いから一盃御馳走に預ツて承知した、ぢやア五十年の

通り相場の後が三十一年、いはゞ名物お梅の生涯を質に取ツた鯨の與五郎、をりくうるさく利息を取りにも來ねエが、半歳に一度か一年に二度ぐれエ、その質物に痛み損じのあるかねエかを調べに來るが、今から念を押すが其時に文句はあるめエな、宜いか」

「よろしいとも半歳に一度や二度といはず、せめて月に一度づつは、おいでなさいよ、また折角の質物に病み煩ひがあツたり、家の轉宅その他の萬事について、全體どこへ届けませう、かうはいふものゝ萬一もし、その金が出来次第に渡すかも知れませんから、つりのお金の出来る出来ないより實は威嚇文句を並べた其方の出様が憎かつたからですよ、それが兎も角、妾のいふ通りになツた今更ら誰が百や二百の目腐れ金で行末の長い身を質に取られますもんかね、廓の年期勤めをしたツて知れたものさ、ほゝゝゝ、ですから其お金の届き場所を聞いて置きたいんです」

「は、は、は、油断のならねエ女だ、うまくいふぜ、この乃公が寝起きの穴を知った上で、どうやら二の幕がありさうだな、いや、わざとくお届け下さるにやア及びませンから、ぢやアお言葉の通り、年に一度や二度といはず月に一度づつは必ず」

「ほ、は、は、は、まア用心深いこと、それほど妾は悪い女に見えますかね」

「いや見えはしねエ見たところは菩薩だ、およそ男と名の付く奴アいづれも随喜の涙で拜んで通るが、さて胸の皮一枚の下を見ちやア身の毛が立つよ、同じ事なら夜の夜半に夢うつ、寝た時の様子を、そつと覗きてエもんだ、その富士額から角でも出やアしめエかね」

「ほ、は、は、一雨毎の箱ではあるまいし、によきくとさう出られては此の舞臺が今日まで無事に持てませんよ、しかしまア要助さんも、よく三年間たゞの要助さんで通れましたね、お手際に恐れ入ります、妾は女で、をりくくの事、それとは違つて

年が年中お化粧なしの其まゝで、お傍にばかり附いて居ながら」

「とんでもねエ處を御感に預つて恐縮だが、お梅さん、こりやア別の談話だ、上手の水から手漏のねエやう、うまく仕遂けなせエよ」

「うまく仕遂けた曉は、今の百五十兩とまた別の價ですか」

「そかア其方の御心付次第さ、すつと曳き出せば一本筋、いつまで嫌に糾れて付き纏ふ絲屑野郎たア少々ばかり違つた鯨の與五郎だ、は、は、は、安心しなせエ、お祝儀にこそ来るかも知れねエが、折角、出来上つた新舞臺へ昔の泥足をかけに行くやうな料簡はねエ、悪木も花の咲いた梢に斧を入れるモンでねエとさ」

「なるほど男は男、さう解けて下すつた以上は猶更ら一時も早く約束のお金を拵へて兎も角この事を済ました後、また更めで、ゆるくとねエ」

「ゆるくと要助時代の談話でもして笑つた方が互のためだ、これでもお梅さん、時と

場合また何かの用に立つ事もあるさ、ぢやア今日は此まゝ」

「かう當ツて碎けない前の文句は、年も取らない愚痴な女と思ツてね、お氣に觸へないやう、ほゝゝゝ」

「氣に觸へるところか、實ア心に感心した事もあるが、此方から言ひ出した物の形を見ねエうちは何だか譽めるも妙なもんだ、また出直して來ませうよ、如才も無からうが、随分あの方を大事にかけなせエよ、三年でも主人は主人だ、しかも男としちやア立派な侍だ、はゝゝゝ」

其三

戀に狂うて我身を覗ひし上汐の勘太も金に轉んで我身を覗ひし鯨の與五郎も、右左やうく取ツて押へて静めし今は、たゞ眞正面に残りし敵、敵とはいへど、これは先方

より我身を覗ふでなく我身より人知れず覗ふ心の一物、いかにして仕遂げんと、餘所目には忍び來る夜の戀まちわびて眉を顰むる風情なれど、胸には上二番町の角屋敷を丸呑みにして思ふ男に世を取らさんとの企謀、されば朝夕の玉かと疑ふ花の露にも雫にも毒を含んで、いよく物凄し、

臙に霞む月の風情は無けれども、寢よけに思ふ春の夜の更け易く、樹間を漏るゝ窓の燈火いと濕やかに、氣も心も打ち解けてや、家の次男でこそあれ當時に名を得たる武藝者の大林小三郎も、戀には尋常の男となり、襦衣のまゝの身を横へつ、わざと枕の上の肱枕ほろりと酔ひし目元に笑を含めば、お梅も馴れて今日このごろは何の隔意もなく、つくろはぬ花の色香ぞ一入の情を含みぬ、

「梅、今更ら異な事をいふが、あの兩國の名物と唄はれて水茶屋を出して居た時と、

今かうして居る身と、いづれが面白いな、人の見る目は格別として自分の心では
 「あれ、知れた事を態とらしうお尋ね遊ばすよ、いくら名物といはれても何と唄はれ
 ても、その唄ふ人に養はれる身では無し、また此方が思ふ戀でも情でも無し、あか
 の他人が我物顔に朝夕の出入、それも十人十色とか申しまする人の心を汲んで、い
 ちく外さぬやうに客扱ひ致しまする苦勞氣兼、聞き及ぶ廓の勤めでさへ、かう
 はあるまいかと存じまして、をりくは我身ながら、なぜ淺ましう生れたかと、ほ、
 ほ、それが今、どうした御縁か、あとは申し上げませんから」
 「あとを言はない、なぜ言はぬ、何か心に不足でもあつてか」
 「恐れながら、その不足は澤山いふにいはいはれないほど御坐いました」
 「む、いろくいふにいはいはれないほど不足がある、いや arīも致さうが、たゞ自分の
 心に包んで居つても分らないから、兎も角その不足を聞かう」

「申し上げたところで、今更、どうも致し方の御坐いませんもの」
 「致し方が無いと申せば萬事それまで、しかし思ふ事いはねば腹ふくる、業とか云う
 ての、は、は、は、わけて女は身の毒、癩の種と唄ふではないか」
 「ほ、は、は、それでは、どうせ致し方のない事で御坐いますが、まづ申し上げて見ま
 して」
 「む、何事も遠慮なく打明けて言ふが宜い、かうした間で無用な會釋は却つて水臭い
 ぞ」
 「實のところを申し上げますれば、いやしい妾と不釣合の御身分柄が第一の不足、ま
 た男は九分が最上といふ諺も御坐いますに十二分あまり御器量が美過ぎてお生れ遊
 ばしたのが第二の不足、第三は少々、恐れ入りますから、これだけは、ほ、は、は、
 もし妾風情と今が今、すぐにも世間晴れて此ま、添はれるやうな、低い方ならばと、

をりく心の中で迎も叶はない事を只一人、また其上に、殿方には惜しいほどの御器量が妾の身に取りまして猶更の不足、猶更の氣苦勞、不吉な事を申し上げますが、せめて片目か片耳か人並に外れた醜男にでも、お産れ遊ばせば却って、安心の致しやうも御坐いますに、何分、御身分と申し御器量と申し、第一お家柄に取っては此上もない御武藝と申し、その外の事は存じませんが、憎らしいほど萬事お揃ひ遊ばして、しかも御年輩が男匂ひ俗にいふ青松葉の千兩色、これが何と致して賤しい妾風情の、誰が目に見ても末は知れきって御坐いますもの、なるほど、慾を申せば際限のない世の中、たとひ半歳でも一年でも冥加には存じて居りますが、ついまた女の浅い愚痴な心から、いつか自分の身のほども忘れまして」

「は、は、は、不足々々と大事に何をいふかと思へば、たわいもない、いつぞやも侍に二言はないと誓って申した通り、たとひ身分が違つても何としても誰が遮らうと

も、よし如何なる面倒が差起らうとも、梅、其方は生涯、捨てぬ氣の小三郎に無用の心配、は、は、は、しかし、今こればかりは憚って言はれぬと申した第三の不足を聞きたい」

「それは、恐れながら、御次男様に、お生れ遊ばした事」

「次男に生れたのが、其方の身に取って、なぜ不足に思ふ」

「たとひ御次男でも御三男でも、どうせ妾からは及びもない不釣合の御身分、もし、同じ事なら御總領にお生れ遊ばして、めでたく御世嗣の御全盛を、蔭からなりと伺ひたう存じます、低ければ低いで今が今このまゝ世間晴れて添ひたいが女の情、もまた迎も叶はない以上は、せめて一段づつなりと高い御出世を祈りまするが女の情、まだ御意も得ません妾、なほさら恐れ多い事とは存じますが、もし萬一、萬々一、其お兄様が自然の御病氣で何ぞで、若隠居でも遊ばす事になりますればと、を

りく罰の當るやうな怖ろしい氣に」

「は、俗にいふ輩の引倒し、決して悪くは取らんが、さて人には長幼の序といふものがあつて、わけて武家は先祖代々の嫡々、第一が公儀の定則、その時の一家一門が手前、たとひ現在の親が何と申しても叶はぬ事、まして今の兄は家格の外に別地千石も戴くほどの身分、は、左様な事を夢にも思つては濟まんぞ、かりにも舍弟が情を受ける身として其兄に、は、しかし悪くは取らん、いはゞ女の思ひ過ぎといふもの、あまり思ひ過ぎては却つて物事が思ひ足らぬよりも過誤の出来易い世の中だからの」

「恐れ入ります、萬事この妾が悪う御坐いました、ついくお心に甘へまして、何氣なく申し上げたばかり、キツと以後は」

「いや叱つたのではない、たゞ心得のためだから別段、あらためて氣にするにも及ば

ン、時に其方が伯父の上州勝とか申す男、いつぞや一度、逢つたまゝ、このごころ如何いたして居るの」

「はい、をりくまゐりまして、蔭ながら妾に御機嫌を伺つては居りまするが」

「む、さうか、また折があらば逢ひたいと傳へてくれ、あれは萬事なか／＼行き渡つた苦勞人と見えて、しかも随分、腹の底に分別のありさうな男、ところで兩國の水茶屋以來、しきりに其方を附け覘ふ上汐の勘太とやらいふ奴の一件」

「それは、あの初めて御目通り致しました時、及ばずながら伯父が、お受合ひ申し上げて間もなく、きけば雙方あぶないところまで互に睨み合つて押詰めました様子、しかし其後は却つて無事に何事も御坐いませン、もし此義に就いて御意のあつた時は、もはや大丈夫、勝藏がお約束をした以上は御安心遊ばすやうに申し上げて置け、委細は其うち、ちき／＼にと」

「む、なるほど、流石は二枚舌のない男、しかしその上汐といふもの、全く兼て聞くほどの執念深い奴ならば伯父の手前は兎も角、其方が身は、まだ油断がならないぞ、つまり下種は其をりくくの風次第で、とんと心の定まらぬもの、現に彼の要助も年期は濟んだと申せ、平生から心易く召使うて世間體を憚る此家へも毎度の供に連れて来たものが、ふいと暇を取って何處へまるったやら、は、は、は、氣も軽いが身も軽い奴で」

「それはまあ、いつの間に、あの要助さんが、もう御暇を取ったので御坐いますか、道理で、先達も今夜も二度ながら、お一人、お供のないのは何かお屋敷の御用都合かと存じて居りましたに、それは残り惜しい事、外の人とは格別、今かうして御恩になりますも皆、その最初は結局あの要助さんが橋渡し、いはゞ妾のために月下氷人も同然と、つね平生から別けて心易く致しましたに、お暇を戴くなら戴くで一言

ぐらる心ばかりの御禮のしやうも御坐いましたに、男といふものは」

「は、は、は、なるほど、あの要助が縁の橋渡しであつたの、彼奴、もし入らざる事を世間へ言ひ觸らさねば宜いが、しかし今まで屋敷でも一言さらに此家の事を口へも出さぬ奴、まさか自己の益にもならぬ事を言ひ觸らしも致すまいが、それにしても、あまり暇の取りやうが不意で、をかした奴」

「しかし、左様な氣分のもので御坐いますから、いつ何時、また妾の方へ不意にまるかも、實は心付も致してやりたう存じます」

「む、もし来たならば、其後どこに居るか聞いて置け、しかし今までの馴染甲斐に氣を許して、かりにも泊める事はならんぞ、彼奴も男の端くれ、もはや出れば他人で油断大敵、は、は、は、」

「は、は、は、もし強ひて、泊めてくれと申しました時は何と致しませう、お屋敷へ公

然お使ひを差上げる事はならず、またこれまでの間柄、いかに何でも妾には一夜ぐらゐの宿を謝ります顔もなし、よし謝りましても其まゝ寢込まれては女の力で」

「はゝゝゝ、いよく困った」

「ほゝゝゝ、お困り遊ばさないで、何とか御工夫を」

「工夫は寝た上で考へるとして、まづ翌日の朝まで、待つてくれ」

「きつと翌日の朝、お返事を承りたう御坐います、要助さんに限らず、かうして常に人出のない女世帯は、とかく不用心なもので、をりく風の音や鼠なぞに驚かされまして、おもはず飛び立つやうな事が」

「いや、それは梅、其方に似合はぬ事、不意に武士が血刀を提げて飛び込んだ時でさへ顔色も變へず花の姿そのまま、盆に水を汲んで持ち出した名物女、しかも其時は去年の夏で十八、ことしは十九、あの落着いた性根は如何いたしたな」

「ほゝゝゝ、あの時は野に咲いたまゝ、主のない妾、其後、いづれの方にか氣も心も取られまして今は臆病の梅、音に響いた板額や巴も思ふ人の前では蚤を取遁して笑はれますとやら」

「や、まるった、眞向上段たしかに一本まるった、このまゝ翌日の朝まで、まるったまるった、はゝゝゝ、」

色を含み情に引き寄せて、我から女の愚痴に返りつゝ、それとはなしに餘所ながら心を探れば、どこまでも兄を兄として身は戀に砕くとも心は戀に亂れぬ本性、しかも言葉のうちに何とやら此身を諫めて後日を戒め、夢にも濟まぬ事と俄に居坐を直せし體、あの顔色にては迎も本人に胸裡の一物うちあけて眞正面より取掛らんこと覺束なきのみか、もしや悟られて一步踏み外せば忽ち萬事破滅の前、まづ縁も情も絶えて戀や無

常の眼前、さりとして此ま、日蔭の色香おめく、褪めて枯れ果てんよりは、罪深けれど
 我身のため思ふ男のため、戀には敵なき世諺、その兄といふ人さへなくば自然に次男
 の世取、いづれにしても人知らぬ早業、ばさりと闇の一太刀にて濟むべき事ながら、
 をしや上汐の勘太は一の手に仕損じたり、二の手に度胸といひ腕といひ固より上州
 勝の役目なれど、元來うかく我手に乗らぬ男、しかも打ち明けては猶更ら一度は此
 事を諫めしほどの男、幸ひこゝに要助の名をかりし鯨の與五郎、三年も住み込みし曉
 その呼吸を吞込んで覘ふ急所は外すまじけれど、此奴また尋常の淺瀬を渡りし悪黨な
 らねば却つて心に義理の柵、恩義の端に刃向ふとはいふまじ、されば名もなく心もな
 く、後へは退かぬ野猪武者の腕のみ冴えたる男、同じくば其場で相討の共斃れするほ
 どの男か、但しは兼ての望み通り我身を屋敷に入れて笑渦の露に落すか、落ちなば音
 もなく扇子の風に追ひ出す工夫もあれど、それさへ斯くと知らねば現在の本人いと

我身を思ひ過ぎての深情こゝ、兩三年を此ま、待てといふ苦しさ、お梅いよく氣を
 揉み心を碎いて、夜なく人知れぬ腸を廻らしぬ、

其四

四十餘年の今日まで危き浮世の丸木橋を渡りて、幾度か地獄の釜の上をも一足飛びに
 飛び越えつゝ、無事に残るが不思議の生命一個、我身ながらも拾ひ物の今が今、この
 まゝ無價で捨て、も惜しからぬ上州勝が最後の慰み半分には、男と男と睨み合つて立
 つの立たぬの意地も張も仕飽いたれば、さらりと氣を替へて花の姿の楯ともなり笠と
 もなり、また人知れぬ色香の影より操り糸を曳きながら、二千石の身代に戀の本望ま
 で取添へて渡して見たき心の一物、これが父でなし子でなし無縁の他人と、をりく
 我身を顧みて冷かに笑ひぬ、

春過ぎて夏まだ來ぬ肌心地に、うたゝ寢の夢さめて晝の枕を押し遣りし折しも、我に逢ひたしとて五十あまりの女、しかも平河町に居りしものといへば、お梅の母親より外に心當りはなしと、そのまゝ、奥の一室に通しぬ、

「こりやア珍らしいお客様だ、ちよいと過日お梅さんから聞いが、この一月の末ごろ何だか都合あつて四谷の大木戸邊へ別になりなすつたさうだね、しかし、その方が却つて氣樂で宜からう」
お梅さん

「はい、いえ別に離れたくも御坐いませんが、女の年寄は、とかく若い人と一緒に居ては互にね、第一あゝいふ方が、お忍びで入らッしやるんですから、實は遠慮かたがた」

「その娘の親だもの、何も遠慮するにやア及ばねエが、まづ老先の寄るものは氣兼ねしに暮らすが壽命だよ、はゝゝゝ時に、何か用でもあつてかね」

「まだ一度か二度、お馴染も薄う御坐いますが、いろくお梅が、お世話になります事に就いて少々、實は娘にも内證で伺ひました理由」

「馴染の薄い厚いは兎も角、お梅さんたア水茶屋以來、妙な事から今日まで、そのおツ母アだもの、さア打ち解けてね」

「今更ら不意に變な事をお尋ね申すやうで御坐いますが、あの梅の、身の行末は全體どうなりませうか、ちよいと其事を」

「むゝなるほど、こいつア不意に妙なこつた、しかし、そりやア見當違ひの尋ねやうだ、本人のお梅さんに聞いた方が早いだらう」

「いえく本人は、何と申しましても今年やうく十九の娘、まだ自分の身の行末や物事の善悪は、とても分りませんから、これは是非とも、貴方に」

「いよく變だな、今年やうく十九の娘といふが、娘にも依りけりて世間普通の娘

たア飛び抜けて違つたお梅さん、よしその本人が分らねエにしたところが、他人の岡目より現在おツ母アぢやアねエか」

「いえ、これは妾の申しやうが悪う御坐いましたから、あらためて、お願ひ致しますが、どうか、娘のお世話を今日かぎり、これまでの御恩は御恩、これからのところは、是非お見捨て下さいますやう、お願ひに出ました理由で御坐います」

うてば忽ち響く上州勝、は、ア儲は悟つたなと思へども、もとより海も山も呑み込んでの今更、顔色も變へず膝も進めず、ちらと其まゝ見れば、はや母親の目に涙を浮べぬ、

「世話といふ世話もした事がねエから、あらためて謝絶られる理由もなし、また更めて見捨てるといふ理由もなし、まして恩も絲瓜もあるものか、たゞ一時の心易立ては、顔色を知らねエものより少しは、知つて居るくれエの事さ、しかし今日、

わざく来て、しかも、お梅さんへは内證の抜掛けで、さうまで言ひなされるからア委しく聞くにも及ばねエ、此方から打ち出すが、例の一件を」

「はい、實のところは、それに就きまして、いつぞや、貴方と梅が裏の離れ座敷で」

「は、ア、あの時、立聞きでもしなすつたんだね、なるほど無理はねエ、道理だ、なさぬ中でも母子の情として、そりや黙つて居られめエ、ぢやアお梅さんにも、いろいろ意見して見たが何分あゝいふ氣性の天性で聞かねエところから、呆れて急に四ツ谷へ別れたものゝ、やはり母子の縁がある以上、寢覺が悪くつて堪らねエといふンで、この上州勝へ、この勝さへ居なけりやア娘の力になるものが無エから、自然に怖ろしい氣も消えるだらうと思つて、來なすつたんだね」

「なるほど、娘が萬事の御相談相手に頼むほどの御方、妾が申さないでも、そこまで見通しに御存じの上は猶更、是非とも貴方といふ娘がための後楯を、この母が、お謝

絶いたしたいばかりで」

「いや、さうあるべき筈だ、さうなくツちやア叶はねエ處だ、萬々さらに一言もなし、あのまゝ無事に優しく、温順しくして居りやア、たとひ世間晴れての奥様になれずとも、相手の身分が身分で男振といひ氣立といひ、どこに一點の不足もねエ母子安樂の守本尊、それを冥加とも思はず、いはゞ闇雲飛乗の太エ料簡を起して、邪魔になる現在の總領を押退けた上、その後へ手も濡らさず次男の戀男を抱いて二千石の身代を我物にせうといふんだから、身の毛を立て、驚いたも決して無理はねエが、ね、おツ母ア、諦めて仕舞ひなせエ、ありやアお梅さんが持つて生れた本性だ、昨日や今日、ふいと湧いて出て皮肉へ宿った當座の迷ひか間違ひなら、また何とか削ッて取る工夫もあるがね、前世から持つて來て胸骨の中に巢を作った根性、殺さなきやア止まねエのさ、まだ高が二千石の旗本で加之も其人に心底、惚れ込んで居れ

ばこそ少しやア自分にも弱身があつて、毒々しうも大袈裟に遣らねエが、もし萬一あの無鐵砲の氣性で未練氣なしに凄腕を出した日にやア、なか／＼人の三人や五人の生命は朝飯前の茶うけになるくれエだよ、またこの上州勝が好事に四十面をさけて、わざ／＼薪に油を注ぐ惡黨のやうに思ひなさらうがね、まさか、それほど罪の深い奴でもねエさ、最初は水茶屋の時、あの上汐の勘太が事から男と見込んで頼まれたが原因で、別段これといふ約束誓言を結んだでもねエが、世にいふ他生の縁か、夢にも人に知らさねエ腹の底まで打ち割ッて相談されちやア乃公も持つたが疾病の白痴で、退けと言ッても退かぬ氣の一點張、しかし、お梅さんが心に針の尖を丸めこそすれ、決して磨ぎ出すやうな事はしねエから、まア安心しろといふも呵しいが、この上州勝が附いて居る以上、いくら遣り損ッても、あの晝に描いたやうな美しい顔を首にして木の空へ懸ける氣遣ひはねエ、もし萬一、仕損じたところが、

無事に幕を下して、規つた二千石が手に握れねエといふばかり、惚れ込んだ今の人は飽まで其まゝ戀を仕遂けさして、たとひ二人が昔の夢を託住居、どこまで落ちて流れるとも、この上州勝が引受けたから、兎も角、おツ母アは萬事、何も知らねエ顔で、幸ひ家も今ぢやア別の隠居分、たゞ氣樂に老を養つた方が宜からうよ、ちと水臭いやうだが物は諦めやうが第一だ、なアに腹を痛めて産んだ子ぢやなし、藁の上から貰つて育つた子ぢやアなし、たゞ三四年の間、かりに親子と名乗つたばかり怖ろしいと思やア猶更、すつぱり思ひ切つて捨てた氣になりやア宜いさ、はゝゝゝと笑つちやア濟まねエが、さうまた泣いてばかりも居られめエ、悪いと言やア悪いやうだが、ひらつたく考へて見りやア自分の惚れた戀男、しかも外から持つて來た種でも無エ次男を總領と取代へて二千石の主人にした上、自分も氏なくて玉の輿に乗らうといふんだから、いはゞ器量ものさ、出來れば天晴の出世さ、碌でもね

エ野郎と手を取つて産んだ親の顔へ後足で砂をぶつかけながら、驅落をする女もある世の中だもの、つまり黒いもなア白くならねエと見るのが早いよ、きけば死んだ御亭主が昔の義理か何かで、牢屋普請の功に代へて救ひ出したといふが、どんな理由仔細があつたにしろ、わづか十四か十五の花の苔で現世から地獄の底に飛び込んだお梅さんだもの、いづれ持つて生れた根性も身にうけた運命も尋常の女ぢやアねエさ、しかし其時に救ひ出した昔の義理と救ひ出された現在の恩が親子の縁となつて、今日まで無事に繋いで來たところ根が白いと黒いとで別れたゞけの事、お梅さんが持つて生れた毒を義理ある親に吹いたといふぢやアなし、こゝは互に浅い夢と諦めるより外はねエ、意見も折檻も縁あればこそ、その縁を絶つて仕舞へば無縁の他人、とさ、仕方なねエ苦しませぬの道理でも付けて、ありやアあのまゝ、自業自得の成行を見るより仕様模様もねエよ、おツ母ア

「いえもう、そこまで段々と事を分けて伺へば、今更ら妾のやうなものが何と申しても、實は貴方さへ退いていたゞけば自然に力が落ちて怖ろしい氣も薄らぎ、なほ其事でも悟らなければ、むごい事とは存じますが、結句これも梅の行末の身のため、この母が上二番町のお屋敷へ泣き込で萬事うちあけた後、御本人の手から今の戀を絶つて戴かうとまで、いろくくに考へまして」

「いや一言もねエところだ、しかし今いふ通りの理由で、どうせ焼き直さなきやア直らねエものを、なまなか道理や意見ぢやア却つて火の手が燃え上るばかり、こかア萬事、知らねエ昔の事と諦めて、おツ母ア、自分の老先を氣樂に暮らすが宜いよ、いくら根に毒があつても元來が伶俐で發明で行届かねエ隅も寸隙も無からうといふお梅さんだもの、義理も人情も物の理窟も人並すぐれて腹の底にあるんだから、うまく出来上れば二千石の御老母様、もし悪く踏み外しやア何處の婆さんか夢にも見

知らねエ人といふ決心さ」

「なるほど、この邊も娘から、餘所ながら聞いた事は御坐いましたが、きけば聞くほど、何故まアあの美顔で、あんな怖ろしい大膽な料簡が出るかと、しみじみと凄くならまして、また昔も今も、寢覺の善くない事をした人の末はと、いろくくに案じられまして」

「いつまでも言つても同じ事だ、しかし、血を分けた母子でもねエ義理も義理、わづか丸三年の間柄で、そこまで自分の身を切るやうに心配して歎いて居たといふ事アこの上州勝が言葉の外でお梅さんの腸へ通じるやう、きつと受合つたから」

「何分にも、妾よりも娘が行末、どうか宜しうお願い申します、三年は儲置いて、たとひ三日でも、よくく前世からの約束なればこそ、現世で母子の縁を結んだもの冥加の怖ろしい事して二千石の奥様を娘に持ちますより、無事に怪我のないやう仕

損じて、どこの婆かといはれた方が却つて、實は死んだ亡夫にも濟まず、また娘が行末を見るのも嫌なり、いッそ思ひ切つて廻國でも致しませうかとまで、しかし母子の縁を切る證據に、生涯を暮らせるだけの事をするから、この江戸に居てくれと申します娘が心もまた」

「それ、そこだ、そこが、お梅さんだよ、別に譽めるンぢやアねエが、自分の毒で自分の五體を八裂きにされるとも、おツ母ア、義理ある親を卷添にするやうな女でねエから、まア安心も出來めエが、あんまり心配し過ぎて牛の角を捻ぢ直さねエやうに頼むぜ、牛の角の曲つたなア天性だ、あれを眞直にせうと思やア、殺して仕舞つて後の事だ、は、は、は、は、」

其五

始めは戀に使はれて水茶屋の素丁稗に追ひ廻され、其後は戀に放されて血眼となりつつ怨恨の寐刃を磨ぎしが、いつしかまた戀に引き寄せ色にかけられて仕損じたれど闇討の手に使はれ、またもや戀に突き放されながら、上州勝の口車に乗つて下手の横悟りに戀を諦めたる上汐の勘太、そのまゝお梅が手のうちの鞠となりて市川の片邊り眞間の繼橋に人知れず身を轉がせしが、面に受けし疵も次第に癒えて痕さへ薄くなりしかば、何とやら俄に江戸の空なつかしく、しかも慥に一本まるりしと思ひし相手は人違ひにて、思ひの外の無事と聞く上は其後の詮議もあるまじく、第一は戀も情も捨てて兄妹の盃せんと言ひ込みし名物お梅の手前、いはゞ降るだけ降つたる雨も晴れて後の照り渡る月額、あらためて立て直せし男振を見せんとて、あはれや立倒しに立てられし意地と張とに戀は捨て、も、五體の底を叩けばふんと匂うて、まだどこやらに残る未練が七分、やう／＼あとの三分を自己が性根として、眞間の隠れ家を立出で

ぬ、

されど身に兇状の覺えある勘太、たとひ頼まれて相手に寸分の疵は負はさずとも、正しく天下の直參を闇に覗いて打ち込んだる我、まして痕は薄らいだれど面に證據の極印ありと、時刻を道程に量つて日の暮るゝを待ち、やうく本所の端にかゝりし頃は家の燈火ちらほら、馴れし回向院の鐘の音に耳敏て、兩國の橋を渡りし時は暮れ果てし宵闇の空に俄の雨氣を帯びて星の影もなし、

下は永代より上は吾妻橋までの間を我物として、流るゝ此の大川の水に洗ひし我面も、さては漕ぎ行く舟の櫓柄柄いづれの誰にせよ、呼べば忽ち知らるゝ筈の我名も今は暫時、そのまゝ、打過ぎて見返りながら、妻子なけれど塹と定めし柳橋の古巢に立寄りんとせしが、無言に飛び出してより以來さらに一度の音便せざれば却つて委細を知らぬ朋輩子分の事面倒、さらば男は當つて碎けし後の上州勝を訪はんとせしが、世間を

張る身、出入の多き家、いづれも油断ならじと萬一を恐れて足を早めつゝ、かくなりし事の起因の平河町、お梅が許へ急ぎぬ、

まだ降り出さねど宵闇の空を閉ぢて星の光りもなく、まして淋しき櫻田門の濠端傳ひ片側は軒を並べし大屋敷の武者窓より幽に火影を漏らすのみ、折しも一人の客に呼ばれて土堤の樹蔭に荷を卸せし夜啼蕎麥、勘太みるより歩を停めて、おもへば僅に三四里の道程ながら、わざと日脚を圖り時刻を量つて夕飯を喰ひ外したる今更、時に取つて幸ひの腹加減と、そのまゝ、立寄つて薄暗き荷の蔭に打ち屈みつゝ、飢ゑたるまゝに咽喉を鳴らして待ち兼ね、脇目も觸らず差俯いて箸とる眞正面より、はや喰ひ終りし一人の客が火影に透して頻りに我を窺ふ體、勘太ふつと何心なく振り仰げば、道中の旅装でもなきに脚絆と草鞋の姿、しかも腰の横合に十手の赤總ちらと見えしかば、はッと驚いて思はず立たんとするや否、忽ち飛鳥の勢ひに踏み込み來つて大喝一聲、御

用と叫びし面上へ今しも手にうけて湯氣の立ッたる蕎麥の大茶碗、さツと抛けて脚に蹴返し、そのまゝ闇を飛んで一散に遁け出しぬ、

宵闇の雨雲いつしか漏れて、はや降り出せしかば、まだ更けねども人通はぬ平河天神の横町、お梅が門の戸を軽く叩く音、

折しも下女は臺所に用ありて奥の離亭より來合したるお梅、そツと戸口に立寄りながら、

「誰、どなたで御坐いますの、お名前は」

「さういふなア、お梅さんぢやアねエか、鴻の臺さ、市川の眞間から來たんだ」

さらに一入の聲を潜めて、

「上汐だ、ちよいと開けてくんな」

時も時とて、奥の離れ座敷には宵より彼の情人、折も折とて、今こゝに上汐の勘太、その名は隠せども近ごろ受けたる面の太刀疵は例の證據、またこれまでの上汐ならば此まゝ戸の音たて、閉め出せど、仕損じながらも例の闇討に使ひし今更、しかも一時の方便ながら更めて戀を捨てたる證左に兄妹分の盃せんとまでいひし奴、流石のお梅も前後より俄の敵に押寄せられたる心地して、はツと思ひしが、うまれついたりたる不敵の魂魄、じツと落着けて忽ち胸に浮びし一思案、人知れず微笑を含みぬ、

戸外には勘太、しばし音なければ思はず眉を寄せて小首を傾けながら、俄に聲も立てられぬ身、まして今も今とて濠端の事ありしかば、戸口に摺り寄ツて頻りに前後を見廻す折しも、戸内よりお梅が小聲、

「勘太さん、靜肅にして下さいよ、今夜は奥に上二番町が來て居るんだから、どうしようかと思ツて考へて居ましたの、しかし今、あけますよ、靜肅にね、そツと這入

ツて下さい、妾よりも第一、其方の身の爲ですから、奥へ聞えちやア互に困るンで
すよ」

いひつゝ、門の戸そろりと引き開ければ、勘太おもはず首肯いて、さてはと合點せし體、
首を縮め身を縮めて音もなく、潛に忍ぶが如く入りて窺へば、まだ開け放ちたるまゝ、
縁先の庭を隔て、樹間がくれの丸窓より漏るゝ燈火の影、お梅あれと指さしながら此
方の一室に伴ひつゝ、わざと行燈を引き寄せて薄闇く燈心を減らせば、ほつと臙けの
中にも冴えて際立つ雪の富士額、わけて今夜は花の色香を添へし薄化粧の匂ひ、ゆか
しけに忍び男を隠すが如く奥を憚りて我を扱ふ風情に、思ひ切つたと叫びし戀も情も
今更に惜しく勿體なく、うつゝ、か夢か何とやら嬉しき心地して五體を震はしぬ、

「妾も氣にはかゝつて居るンですがね、あゝいふ事のあつた後は猶更、互の身の爲
めと思つて、わざと上州勝の親分に萬事を頼んで、しかし勘太さん、妾の口からい

ふと何だか妙に呵しいやうですが、あれほど面倒に糾れてあつた事を、さつぱり塵
埃も残さず水に流して下すつたところは流石に男、あんまり思ひ切つて綺麗に流さ
れて見ると、女といふものは却つて、また妙な氣が出てね、ほゝゝ、だが妾も、そ
のくらの義兒さんを持つたと思へば、急に心丈夫になつてね」

「いや、其方は假令お世辭にしても此方は眞實さ、腹の底を叩き割りやア、きのふ今
日、たゞの浮氣や洒落半分で思ひ込んだ理由でもねエが、うまく遣つた筈の一生懸
命が人違ひで加之も無事息災、蚤に喰はれた痕もねエといふ始末、そこへ上州勝が
來て膝と膝とを突き合した上、いろく段々と事を分けての萬事を聞きやア乃公も
男だ、實ア五體の骨に未練が腐りついて残つて居たつて、これまで枕を並べた男女
ぢやアなし、まさか嫌たア言へめエさ、それも此まゝ、勘太の面が極印うたれた上を
踏み潰すといふなら、また文句もあるが、あらためて兄妹分になると一分を立て、

来た曉は、は、今までの萬事、夢さ、ところで今夜この上汐の来た事、もしあの奥へ知れちやア呵しくねエが、どうしたもんだらう」

「さうですな、去年の夏、月見舟の事は兎も角、闇討にしようと思つたのが今あの人で、人違ひで疵はなかつたが現在、刃向はれたのが今あの人の兄様といふんだからまして其顔の證據もあるこつたし、兄弟ともに身分が身分だし、うかくすると、しかし勘太さん、妾のいふ通りになるなら大丈夫、安心して居て下さい」

「いふ通りたア、どうするんだね、實ア今も此處へ来る途中で、薄氣味の悪い赤總十手に出逢つてよ、まさか此事に就いてぢやアあるめエが、此方が疵持つ足で落着かねエ様子と、第一この面の疵が誰に見せても怪しいところへ先方が職業だ、いや、とんでもねエ馬鹿を見か、つたぜ、は、は、は、」

「なアに、それほど厳しい詮議も無いやうですから、そりやア何かの見當違ひで規は

れたんでせう、しかし時も時とて折悪しく、かういふ工合に現在の相手同志が一軒の家に落ち合つて居ちやア全く油断が出来ません、と言つたところで、今時分うかつか家戸を歩くのも、第一この梅が事の原因で斯うなつて、わざ／＼来て下すつたのを出ると言つても出す理由はないんですから、いッそ今夜ア宿泊つて、明日ゆる萬事の相談しようぢやアありませんか、實は、いろ／＼談したい事もあるし、また宿泊つても、あの奥は別に建てた離れ座敷で棟が違つて居ますから、少々物音は聞えませんよ」

「なるほど上州勝が言つた通りだ、小面の憎いほど凄いな中行届いた深切氣があつて、ぢやア度胸を据ゑて泊り込むとしよう」

「なアに妾が中間に立って氣を付けるからは、障子一枚の外と内とでも互に顔を合さすやうな下手な細工をしませんから、わざ／＼折角の度胸を据ゑなくつても、平氣

で安心して遠慮なく鼻の聲も」

「さう聞いちやア義理にも寢込で夜半に寢言の一度くれエ、いはなきやア濟まねエが、さて男の口から水に流して思ひ切つたと言つたもんの、あれほど性根を打ち込んて血眼になつた奴が膝小僧抱寢の一人耳へ、その女が相手の枕を並べて春の雨、しつとりと濡れの睦言を聞かされるたア何の因果だ、少々心細いやうで嬉しくねエな、どうか今夜だけは萬事お静に願ひてエ、あんまり痴話や口説が高くなると熊谷蓮生坊が陣鉦の音を聞いたと同じことだ、折角の道心に魔がさして、いつ何時また還俗するかも知れねエからな、は、は、は、」

「ほ、ほ、ほ、妹の事は何でも兄が辛抱するもんですよ」

「いや、とんでもねエ妹を持つた、やはり元の他人で居てエやうな氣がして、今更ら上州勝が恨めしい」

「ぢやア水に流しても、泡沫ぐらゐるは少々、どツかに残つてるといふんですか、ほ、ほ、」

「は、は、は、一時は水嵩まして堤防でも何でも押崩さうとしたんだもの、いくら綺麗に河床が見えても、泡沫ぐらゐるぢやねエ、どツかの隅に淀んで淵になつてるよ」

「もう嫌、聞きたくは無いか、もしその淵へでも陥り込むと不可ないから、ほ、ほ、ほ、しかし萬事、今いふ通り、しづかにして下さいよ、あらはれたつて妾は何とでも濁して見る心算だが、その顔の疵が證據で妙な事になりますから、たつた一夜の辛抱、ゆるく明日があるんですもの」

「ぢやア萬事、明日の事にしようか、ところで今夜アわけて長からうよ、ねエ」

「まだそんな事を、長いも短かいも、ぐツと一寢入に、すきな夢でも、ほ、ほ、」
庭を隔てし奥の離れ座敷には大林小三郎たゞ一人、たしまぬ酒の盃にも飽き果てつ、

床の柱に身を凭せて扇子に小膝を軽く叩きながら、例の小謠を中音に唄ひしが、お梅が母屋の方へ行きしまゝ暫し歸らぬのみか、誰やらと語らふ體、ひそくと聞えて、しかも男の笑ふ聲、はゝと漏れしかば、おもはず眉を擧めて耳を欬つる折しも、庭下駄の音を忍ばせて前後を見返り勝に、そつと入り來りしお梅の姿、何とやら物おもふ風情に花の色香を擧めて、時ならぬ風に惱めるが如し、

「梅、どう致した、急に氣分でも悪くなつたのが」

「いえ、別段どこも悪うは御坐いませんが」

「どこも悪くないといふが、何とやら顔色が、ところで今、誰か來て居つた様子、しかも男のやうだの」

「はい、實は、それにつきまして、何と申し上げて宜いやら、思ひも寄らぬ事、途方に暮れて居りまする」

「む、今、來て居る男の事について、思ひも寄らぬ心配とは、全體、いつこの何者がまるつた」

「外でも御坐いません、かねて、お耳に入れました、あの上汐の勘太と申す奴」

「何、例の上汐といふ奴がまるつた」

「過日、伯父の勝藏が御目にかゝりました時、及ばずながら彼奴の事は、お引受け申しましたところ、とても男と男の表立ッた張合に叶ひませぬ苦し紛れ、卑怯にも此家を探し當てまして、いはゞ敵の知らない間道この妾を」

「や、いよくけしからん奴、して何と申してまるつた、いかに致す料簡で來居つたな」

「白刃を眞綿で包むとは彼奴のこと、おもひの外の微笑を含みまして、そのまた言ふことの憎々しさ、おいお梅さん、和女のために血眼となつて今日まで四里四方の八

百八町を探し歩いた心中男、いはゞ糸目の切れた戀の奴唄で、ふわくと風に吹かれて飛んで来た今更、幸ひ此家へ落ちたからは、どこへ歸る家のない上汐だから、是非とも此ま、泊めてくれ、引き摺り出して叩き出して生命のあるかぎり動かない、いや動けないと、かやうに申しまして」

「言語道斷、不埒千萬、おのれが男づくの腕に叶はぬ破れかぶれ、女一人と見込んで居坐りにまゐつた奴、して其方は何と申したな」

「身を切られるほど、辛い憎い奴では御坐いますが、かねて申し上げます通りの相手が相手で、また御身分柄を思ひまして、今夜こゝに、おいで遊ばす事は猶更いはれず、あの離れ座敷の窓の火は、母が、近ごろ母が病氣で寢て居りまする體で、ともかく、彼奴をあのまゝに、まア何と致して宜しいやら」

「む、よし心配するに及ばん、假令いかなる奴にせよ、よしや鬼にも致せ、まして

吹けば飛ぶべき下種風情の上汐とか、去年の夏の月見舟で手並は存じて居りながら、しかも今夜こゝに来て居ると知らぬは彼奴が運命の果、は、は、は、白晝の相對喧嘩は出来ずとも幸ひの事、なれど、この家内では聊か、何とか致して門外へ連れ出す工夫はあるまいかな、門の戸口を一步たりとも踏み出さば夜陰に往來の無禮討、よし無禮討を名乗らすとも、つまり何者が斬つたとも知れぬ筈、まして身柄を詮議いたせば平生の善くない奴」

「彼奴さへ居りませねば、妾も、第一この後の御身分柄に觸るやうな事も」

「いかにも幸ひ手のうちに這入つた奴を、みすく取遁すも残念、こゝは梅、其方の方便で何とか致して見い、今も申す通り、門の戸口を一步たりとも踏み出せば釜中の魚鱗、たとひ飛んでも跳ねても八幡、手に取つて遁す奴でない」

「それは、それと致しまして、こゝに一つ、どうしても合點のまゐりませぬことが、

全體あの上汐といふ男には、もとより額際に縦の向疵が御坐いました上、今夜、ふと見ますれば、また左の頬から鼻にかけて右の耳まで横に一文字の疵、それも古疵とは違つて、どうやら近ごろ受けて、やうく癒つたばかりの様子、もしや、もしや萬々一、いつぞや御兄様が、あの時は闇と承つて居りますれば猶更の事、どこか似ました御兄弟を夜目に取違つて、斬り込んだ奴、あの上汐では御坐いますまいか」

「えッ、何といふ、左の頬から鼻をかけて右の耳まで横一文字、しかもその疵が近來やうく癒つたばかり、今まで其方が知らぬ新らしい疵とか、や、いよく曲者、我等兄弟を闇に取違へた奴に極つた、さう聞く上は猶更ら以て捨て置けぬぞ、もはや外戸へ出すに及ばん、このまゝ踏み込んで、うぬ一討」

「もしそれならば、妾の事は儲置いてももの奴では御坐いますが、やはり今このまゝ、此

家では却つて、後片付の面倒よりも、第一がお屋敷の方は勿論、世間へも憚つて萬事お忍びで、折角これまで、おいで遊ばす御身分を、妾の事から知れ渡ります道理、それよりは、そつと念のために襖の間から隙見を遊ばした後、いよくならば猶更何とか致して妾が戸外へ誘ひ出します工夫を」

「なるほど、其方のいふ通り、兄の身に寸分の過誤もあつたといふでは無し、ひッ捕へて詮議しても詮議せずとも同じ奴、やはり萬事あとの面倒ないやう、戸外へ突き出して放し討に致さう、ついでに念のため其疵を改めるにも及ばんから、一時も早く彼奴を追ひ出す工夫、幸ひ夜も更けて闇に小降の雨は却つて」

「それでは暫くお待ち遊ばせ、また御用意も」

「は、敵も敵に寄りけり武士の手剛い奴なれば、まして下種の一人、いさゝかの覺悟あつたところで高が術もない力業、その油断を打ち込むに用意も何も、女の其

方に申しても詮ないが、見て居れ、二の太刀は使はンぞ、たつた一討、聲も立てさせぬ筈、は、は、は、は、」

ことし二十五の血氣、まして其道に名を得たる武者、取るに足らねど忍ぶ戀路の邪魔といひ、さらに怪我なけれど兎に刃向ひし奴といひ、おのれと一念そのまゝ、眼を据ゑて立ッたる猛勢、氣は早し腕は冴えたり男は美し、何とやら物凄く燈火の影に大刃の目釘を濕せば、お梅も花を欺く天性の美人、いきくと張り切ッたる目のうち一入さらに怖ろし、

あはれ上汐の勘太が生命の瀬戸際、ありし浮世を顧みて行く先途は地獄か極樂か知らねども今ぞ黄泉と壁一重の運命、石塔を枕として墓原に寝たるが如き我身とも悟らねば、まだ心に残る戀の未練に迷うてお梅が言葉の露を汲み直しつゝ、いふにいはいはれぬ胸の煩惱、いつしかまた湧き出づる嫉妬の思情を奥の窓漏る燈火に通はせて、枕は取

れど身を横へたるまゝに睡りもやらぬ折しも、そつと襖を開けて入り来りしはお梅、わざと襦袢姿の物おもはせぶりに足音を忍ばせながら、勘太の枕頭に身を摺り寄せて打重らんばかりの風情、眉を顰め聲を潜めて耳に口、

「ちよいと起きて下さい、大變な事が、トンでもない事になりますから」
忍び来りしお梅の姿ちらと見るより、心は躍れど身は其まゝ、わざと目を閉ぢ、空寢入せし上汐の勘太、耳に口もろとも揺り起されて俄に驚いたる體、

「何だ、どうしたんだ、今時分、もう痴話も口説も濟ンで、ぐツすり一汗かいたまゝ、夢うつと思ツて居たよ、な、何だ」

お梅さらに花の色香を潜めて四邊を憚りながら、情らしく勘太の身に倚り添うて聲を忍ばせつゝ、

「トンでもない事になりましたよ、宵のうち此室で談話をして居た事が、勿論その談

話の譯は分らないんですが、男の聲といふだけは奥へ聞えてね、さんざ今まで責められて居ましたの、責められるも宜いが、かうと言ひ出したからは根が野暮な二本氣質で、なかく言譯も何も聞くこつてない果が、今そつと見に来るといふんですの、なアに見たつて大丈夫、男は男でも妾の親類とか何とか濁しますがね、第一その顔の疵が、兄様から其時の委細を聞いて加之も大變な名高い武藝者で、どうした疵ぐらるは一目みて直ぐに分るから叶ひません、もし萬一の事があつては、中間に挾った妾の困るぐらるで濟まない事が、去年の夏、月見舟でも、あの通りの早業、まして今度は生命ごとですよ」

「やア、そいつア大變だ、うかくしちやア居られねエ、どうしたもんだらう」
 「どうも斯うも、こんな場合で今更ら仕方がありませんから、兎も角このまゝ此家を遁けて、遁けろと言つては濟みませんが、一時も早く外して下さい、そして外の家

は却つて、幸ひ、あの上州勝の親分を叩き起して今夜のところだけ、明日になりやア妾が、そつと脱け出して行きますから萬事その時に、あとは、今こゝで外してさへ下さりやア後は妾が」

「生命あつての物種、おツと合點だ、しかし及公の出た後で猶更ら面倒ぢやアねエか」

「あとの面倒を言つてる場合で無いから、早く、早く」

勘太きくより岸破と跳ね起きて帯しめ直す寸隙もなく、宵の姿の轉び寝を幸ひ、そのまゝの尻ひツからけて立出づれば、お梅なほさら急いで、前に立ちつゝ、そろりと門口の戸を引き開けながら、手を取つて押出しつゝ、

「闇だから氣をお付けなさいよ」

「大丈夫、乃公より後で下手な事しねエやうに」

勘太の姿、戸外に出づるや否、お梅そのまゝ取ッて返せば、はや奥の離れ座敷より忍んで入り來りし大林小三郎、わざと襦衣のまゝに大刀のみ落し差の體、

「梅、出居ッたか」

「はい、只今そこへ、門口を左に折れて平河町の往來を、たしか右へ、右へ走りまし
た筈」

「むゝよしッ」

さながら飢ゑたる虎の獲物を追ふの猛勢、さつと風の如くに飛び出せば、お梅おもはず四邊を見廻しながら音もなき微笑を浮べぬ、

宵より降り出せし小雨さらに一入の闇を縫うて、大林小三郎そのまゝ一散に馳せ出しつゝ透し見れば、あはれ我を追ひ來る敵のありとも知らぬ上汐の勘太、今ぞ身の運命の退汐時、慌て、飛び出せしまゝ、雨具なければ軒下に立寄りて用意の體を、それと闇

に覘ひし小三郎、据物斬に名を取ッたる武藝者として三間の抜打は一足飛に我手のうち、もはや悟ッて遁ぐればとて袋の鼠、おもはず冷笑うて一刀すらりと抜き放てば、闇ながら勘太の目に光ッて驚くや否、蝗の如く軒下より飛び出せしを得たる業とて大林小三郎、躍りかゝつて矢聲もかけず斬り込んだる腕も刀も萬人に勝れたる逸物、あはれ勘太は其まゝ、兩斷になつて、地響もろとも打斃れぬ、

小三郎そのまゝ、足をあけて闇の死骸を蹴返しながら、もはや蘇生らぬ體に懷中より懷紙を取り出しつゝ、一刀の血糊を押し拭うて鞘にをさめ、その紙を其處に捨て、悠々と立歸る此方の軒に我を窺ふ人影、はッと思へば、四邊を憚るお梅の聲として走せ寄りぬ、

「どこも、お怪我は」

「むゝ梅か、はゝゝ、脆い奴、身に怪我あつて宜いものか、たゞ一討で其まゝ、し
かし其方は危いぞ、うかくかやうなところへ」

「なれど、もし萬一、お怪我でも御坐いましたとはと存じまして、気が氣でなく、つひこれまで」

「む、む、く、それでか、む、しかし早く歸れ、や、徒跣でまるツたな」

「實は、あとで、お叱りを蒙ります覺悟で、お脇差も」

「何、脇差も持つて来た、あの脇差を、は、は、は、いよくあぶないこツた、しかし志節は神妙な女、さ早く一足、前へ歸れ」

其六

最初は戀に狂うて今は戀を捨てしとはいへど、狂ふも捨つるも我身かくてある上は煩惱の種、きくにつけ見るにつけ其戀いつしかまた湧き返りつ、果は白痴の一念いかなる事の破綻とやならん、まして仕損じたれど現在の闇討に使ひし奴、そもや伊勢屋

の事より芽を吹き出せし根元まで知りぬいたる奴、一時の方便と口車に乗せたる兄妹分の約束さへ振舞はされては破滅の基、あの面の疵は猶更ら證據となつて面倒の種、いづれにしても生けて置いては身の爲ならずと思ふ折しも、幸ひ忍んで來りし其夜の一案に、まづ一人の蒼蠅き奴は片付いたり、いざや此上は要助の淺黄頭巾を脱ぎし鯨の與五郎、あれを何とか人知れぬ用に立て、後、また現世の暇を手軽く取らす工夫もがなと、花の色香に包む心の白刃を磨いで、お梅なほも頻りに胸裡を廻らしぬ、かねて聞く戀の邪魔、いはゞ兄への腹癒せ、一刀の下に打ち拂うて猶更ら心地よき小三郎、わけて其翌朝は平生よりも早く起き出でつ、きぬくの別れにさへ微笑を含んで立歸りしかば、お梅も一しほ今朝は氣も心も打寛いだる體、鏡に向うて前夜の寝亂れ髪を掻き上げながら、我と我おもはず花の顔をうつし見て、さてもくみづから手は下さねど、これが大の男一人を殺せしまゝの曉の顔かと今更ら不思議けに小首を

傾けぬ、

をりしも上州勝、ぬツと入り來りて眉を擧めながら、お梅を奥の離れ座敷に伴ひつゝ、その顔を打守りて聲を潜め、

「今日は外の用で來たんだが、今こゝへ來る途中、ついその平河町の辻で町役人やら見物やら大騒ぎの人の山さ、何心なく掻き分けて菰被りの死骸を見たが、お梅さん知ッてるんだらうね、ところが土地で遣られた奴が奴よ、まさか夜半の夢で知らねエといふ筈は無からうよ、しかし、どうして」

お梅おもはず微笑を浮べながら、前夜のまゝの菓子を出し茶を進めて後、やうく膝すりよせて聲を潜めつゝ、

「知ッて居ますよ、少しは可哀さうだと思ひましたがね、遅いか早いかな、どうせ、あのまゝでは濟まない男、幸ひ前夜の闇と雨で」

「そいつは素早いこツたが、しかし、あの斬口を見ると、なか／＼尋常の太刀筋ぢやアねエが、全體、どうして誰が、御用を仰せ付けられたんだね、いくら何でも、まだ鯨を使へめエ」

「ほゝゝゝ、上二番町さ」

「えゝ上二番町だ、なるほど、さつと一太刀に背後から、まるで青竹を割つたやうな手際、なるほど、さうだらう、さうに違えねエがな、よく遣らしたもんだね、あの野郎また何と思ツて運悪く喰はしたんだ、市川の眞間に居る筈だが」

「それが前夜、不意に來て、勿論、今までのやうに眞正面から押寄せもしませんかね、やはり未練があると見えて變に呵しう遠廻しに嫌みツたらしい事ばかり、ところが宵から此處へ上二番町が來て居るといふ理由で、一時、妾はどうしようかと思ひましたよ、裏表に敵を受けたやうな氣がして、しかし、うか／＼狼狽へると萬事の破

滅で、もう取返しにならないと思ひましたよ、一生懸命に智慧を、ほ、ほ、ありもしない智慧を出して、うまく両方を操り糸にかけましたの、つまり一方は驚いて遁け出す一方は怒って追ひかける、そこで雙方さらに一言も交へる寸隙が無くって、雨は降るし夜は更けて居るし人氣はなし、まっくらの闇の中で、たった一撃、あんまり脆過ぎて、お談話にはならないくらゐ、しかし外貌は優しいが全く驚いたほどの早業、思ッても凄くほどの達人ですよ、稻妻のやうだといふのは、あれでせうね」

「は、は、は、際どいところで恍惚けちやア困るよ、しかし上汐といふ奴ア始めから終りまで運の悪い男さ、死んで仕舞った今更ら彼奴の肩を持つてもねエが、最初あの兩國で水茶屋を出した事に就いても、素丁禪か年期小僧のやうに駆け廻り廻ってよ、全く戀なればこそだ、ところが犬骨折って鷹の餌食で、その戀も情も枝も葉もねエ始末、なるほど今から考へると血眼になつて怨恨の寝刃を磨いだも、かはいさうに

無理がねエさ、其奴をまた御用ありと引き寄せて色仕掛に蒸した上、相手も無事、うぬが面の浅疵が宜かつたが、もし一步を踏み損へば彼奴あの時すでに無い生命、やうく市川在の真間の繼橋で疵養生、癒つて出て来ちやア猶更ら蒼蠅といふンで、罪なこつたが、わざく乃公が出掛けて一時遁れの口車を、どこまで運の悪い奴か、本當に受けて此家へ来るも宜いが、時も時とて上二番町が奥へ來合はして居るたア、南無阿彌陀佛、は、は、こりやア乃公が彼奴への香奠だ、お梅さん、せめて月に一度ぐれエは思ひ出して念佛の一言も唱へてやんなせエ、何も腹の底から悪い奴ぢやアなし、いろく邪魔にはなつたが仇をした奴ぢやアなし、つまり眞實のところを言やア此方から御禮をいうても宜い奴さ、もし彼奴が馬鹿でなくって片手を前へ振り上げながら片手を自己が尻へ廻す奴なら、それこそ大事だ、この舞臺を微塵に叩きあけて手を拍つか、いやでも應でも無理往生、動きの取れねエ急所を掴ん

で、お梅さん、手酷い嫌な事を、させねエと言ッても力喧嘩ちやア男と女よ、しかしまア早く埒が明いて宜かつた」

「男の中の男といはれる人の口から、それほど萬事を察して貰ッて、つまらない女でも胸に一物の半分や三分ぐらゐるはある妾が、なるほどと黙ッて聞いて居りやア、何よりの功德ですから、まさか怨恨の念も残りますまい、キツと浮ンで居ますよ」

「は、は、は、そのくれエの料簡で居られちやア、よし無念があつても化けて来る勢ひは無からう、幽霊の方で怖がるからなア、は、は、は、時に過日きいた、あの鯨の與五郎、彼奴まだ出直して来ねエかな、實ア彼奴が三年、身を隠して旗本の次男奉公した理由を聞き出して来たから」

「いえ、来ましたよ、来た事は来ましたがね、思ひの外、談話の早く分る男で、つまり始めに捻ぢ込で来た三百兩を百五十兩にして、妾が人間の通り相場、五十にな

るまで借りる約束で」

「何だ、五十になるまで、ことし十九として、まだ三十一年もあるぢやアねエか」

「勿論、その三十一年に念を押して、ぐうの音も出さないやうにした上で、無事に歸して置きましたか、あの男の三年も身を隠した理由は」

「こいつア驚いた、あの野郎なかく一筋縄でねエ奴、あの國司大名の大部屋で銀張勝負の喧嘩から、相手を四人も叩ッ切ッて逐電したといふ風聞だが、下手に羽を伸ばして高飛もせず江戸に其まゝの大膽、しかも親御が町奉行で總領が將軍家のお小姓で萬一の時は身の柄になるところへ目を付け、うぬの身體は公然だ、ぬ其次男へ腰巾着の中間奉公する奴だもの、なかく時と場合の分別もあつて元來の根性骨も細くねエ奴だ、そいつが淺黄頭巾を脱いで呻り出した三百兩、鬼を追ッかけて地獄の底へでも取りに行く筈の奴が、手軽く半金にして其上また小供談話のやうな五十

年の死際まで待つたア妙だ、ふしぎだ、ちと呵しいぜ、どうしても荒馬の手繩で、ゆるめて置いて不意に、ぐつと絞める計略ぢやアあるめエか、それとも本悪黨の早合點で、此方の度胸が案外のところへ裏路から上二番町の手筋に縋って居る上、うぬが薄間い身にも顧みて、こいつア仕舞った深入る海でねエと淺く磯ツ端で切り上げたのか、兎に角あの上汐風情たア違つて目に見えた毒にも薬にもなる奴だから、そのまゝに捨て、置いてちやア後日の面倒だ、幸ひ彼奴の穴も聞き込んだ乃公が一番逆寄せに出直して、善悪ともに太鼓の判を捺して置かう」

「さうですか、なるほど、尋常の奴とは思ひませんが、まさか、そこまでの男とは、同じ事なら先方の毒になつても此方の薬に使つて見たいもンですなエ、實は萬事に人手がなくなつて困つて居るンですから」

「さ、其處だよ、上汐のやうな奴ア手拍子で軽く飛びも舞ひもするがね、まだ浮世の

雨風に足らねエところがあつて、どうかすると事を仕損じた上に此方の襦袢を引き摺り出すから無効だ、そかア今いふ通り鯨のやうに素早く尻へ手が廻つて、しかも分別が落ちていて腹の臟腑の太い場敷を経て来た奴でねエと、全くの依頼にやアむづかしい、まだ本當の性根は知らねエが、もし乃公が聞き込んだ通りの男なら、随分うちあけて此方のものにしても宜いさ、第一、出来上つて蒼蠅く纏はず出来損つて一人で引受けるといふ奴が善悪兩道の本男さ、實ア此後、あんまりねお梅さんの凄腕を出さしたく無エのよ、たゞ上二番町の御機嫌さへ損はねエやうに、うまく氣心を取つて、をりく糸筋を引くだけの役目で、はゝゝゝいはゞ自然の戀人を遁さねエやう大事にかけて居りやア、その間に仕事は外で運ぶといふ工合にしてエのさ、いくら腕があつても何でも第一の役者が圖に乗つて働き過ぎちやア却つて舞臺に障るからね、おツ母アが四谷へ別れて隠居したのも少しは考へて、お梅さん、な

るべく針を磨き出ぎねエやうにする方が宜からう、その代り乗り掛けた舟の上州勝が漕げるだけ漕いで沖へ出す決心、幸ひ今いふ鯨なンざア片腕にする價值のある奴だから、もし彼奴が乃公の思つた男で、うンと言やア大丈夫、二千石は千石づゝ二人で引受けて働く覺悟さ、それこれのため今日わざ／＼相談に來たんだが」

「どういふ御縁ですか、まアそれほどに妾を、いえもう萬事、よろしくお願ひ申します、實は妾の女の癖に、まだ年も此通り申さば小供のやうな身で、腕も考へも何もある理由ではないンですが、つい氣が急いで心が」

「いや腕も考へもねエどころか、過日も言つた通り、わづか二千石の的ぢやア惜しいくらゐの天性だが、同じ射るにも矢數を費して萬一、外れた時は却つて損をした上に射手の名折れになるから、千本の通し矢で五百本を當てるより百本で六十本、五十本で三十本、まづ十本ぐれエで七八本なら慥に爲遂げるね、はゝゝゝ、兎も角あ

の鯨を一番こゝで當つて見た上、あらためて萬事の相談に來るとしよう、またいふやうだが上汐のため今日だけは精進してやんなせエよ、鬼でも寒念佛の譬だ、惡黨にも義理の世諺だ、人は殺しても人の肉を喰ふなといふのが面白いところさ」

「いろ／＼と、全く妾の身を思つて下さいますりやアこそ、よく分りました、萬事その心得で」

「はゝゝ、何だか仔細らし意見でもしたやうだね、しかし、氣にもかけず、さう早く合點してくれるところが上州勝の惚れ込んだ理由だが、あんまり惚れ込み過ぎると上汐のお供、はゝゝゝ」

「ほゝゝ、もしそんな事でもあつたら、上汐と違つて其場から妾がお供にしられませう」

「この上州勝なら、お供で承知しねエ、まづ先案内だね」

「あれ、怖いこと、しかし妾の先案内は冥途の路に迷って極樂へは行かれませんよ、必ず地獄から行列を揃へてお迎ひの出る身體ですからねエ」

「いや、その段は公乃もだ、現世から覺悟の前だもの、火の車を二挺揃へて行くと思やア間違ひはねエさ、なアに今度この事に係らなくつても、浮世に年貢の借を山ほど積んだ上州勝、お梅さん、實ア萬事おついでにする仕事さ、今更ら更めて寢覺の悪い初旅でもねエから、いくら骨を折って働いても恩に着るにやア及ばねエ、は、は、あの鯨も全くのところ、その料簡で引入れるのさ、彼奴も萬事おついでのある奴だから、は、は、は、」

其七

四十餘年の浮世も浮世あらゆる浮世の山も川も踏み越えて、森も林も入江も里も通り

ぬけたる上州勝が、人知れぬ胸に一物を構へて思案を廻らしながら、これもまた奥齒の牙に絹を着せて淺黃頭巾いくたびか脱いだり被つたり裏も表も自由自在の男、かの鯨の與五郎が猶しばし身の忍び穴、その本郷の札の辻の隠れ家を、じやの道は蛇が知るの世諺ぬツと無言に門口より入りて見れば、男世帯に飯炊の奴たゞ一人の佗住居、主人の與五郎は折しも障子を引開け、額越に軒の日脚を窺ふ體、上州勝それぞと見て忽ち聲をかけぬ、

「やア鯨か、めづらしい其後は、どこに居た、まさか逢はうたア思はなかつたが、つひ門を通つて、ちらと見た、は、は、は、しかし、いつも達者で何よりだ」

與五郎おもはず眉を擧めながら、知らぬ奴が馴れくしけの聲、しかも久しく馴染甲斐のやうなる言葉と、ふしぎに上州勝の面體じツと見て俄に思ひ出したる如く忽ち驚きぬ、

いつぞや上二番町の屋敷より朝迎ひに行きし時、お梅と共に門口まで送り出せし奴、伯父とは聞けど風體といひ面魂といひ、よし眞實の伯父にしても一癖のある男と、睨みし其奴が今こゝへ不意に押寄せ來りし心中、さてはお梅がために逆寄せの二番狂言、なか／＼退くべきところにあらずと、冷かなる笑を浮かべながら、

「どこの誰かア知れねエが、随分これまで曝した面だから、数の多い其方が覚えて居ても此方は一人で、はゝゝゝ、濟まねエが忘れた、しかし、一目みて鯨といふからア、まんざら初めてでも無からう、うす汚ねエが、まア此方へ上ツて、ゆる／＼茶でも呑んで行きなせエ」

「いや、其方で忘れて居ても乃公の方ぢやア萬事、委細承知だ、もとのこたアいふにも及ばねエ、まづ近ごろ三年間は上二番町で旗本の次男奉公、たしか要助さんと言つたツけな、しかし今日は、その要助さんに逢ひに來たんぢやアねエ、やはり元の

まゝ鯨の與五郎として少々、談話が、なアに別に憚ることツてもねエが、今こゝに居た男、ありやア手足かね」
 「手足といふほどでもねエが、まア爪の垢ぐれエさ、しかし身に付いた奴だから心配はねエ」

「ぢやア御免なせエとして、萬事まづ搔いつまんだところから」
 互に場數を経て物に馴れたる男と男、目と目を見合して何とやら角ある中に打ち解けたる體、また打ち解けたる中に角もありて、膝は近寄せながら心と心は隔てつゝ、いざとならば疊半枚の間を眼前の勝負と定めぬ、

「なるほど、この鯨を要助と知ツたので思ひ出した、たしか平河天神の横町で、あの
 お梅さんの伯父御」

「はゝゝゝ、實ア伯父でも何でもねエ、兩國に住んで勝藏といふもんさ」

「む、兩國の勝藏といやア、かねて聞き及んだ鬼勝、上州勝」

「その鬼勝の上州勝が伯父といふ觸込の名物お梅、いはずと分つたこつたらう、分ればこそ要助さんを頭巾を脱いで來なすつたのだから、今更ら委しい事は言ふに及ばねエ、つまり第一が、申込の三百兩の半金にして貰つて百五十兩、十九の今から三十一一年間に渡す取るといふ氣長エ妙な約束にしたさうだが、ありやア全體、どういふ算盤球で弾き出した勘定か、まづそれを聞いた後、あらためて相談してエ事があつて、わざぐ」

「は、は、は、は、外の奴なら、理窟も付けて随分、うまく談すがね、上州勝と聞いた上は餘計な艶も綾も面倒だ、一本調子に叩き割つて打明けたところ、實ア思ひの外に底が深いと見込んだから、うかくして胴骨の濡らさねエうち脛の三里の淺いとこゝろで引上げたのさ、もう一文も取る氣はねエ」

「なるほど、案に違はずだ、しかし目の届いた手の早いものだな」

「いや野郎の圖太い奴なら、意地からでも退かねエが、女の凄いなア御免だ、しかし今年やうく十九の花の色香で、蟲も殺さねエ面をして、あの度胸があつちやア猶更、あんまり毒々しくつて寄り付けねエよ、をかくし近寄ると水の中で河童に抱き付かれたと同じこつた、遁けも叫びもならねエうちに五體の生血を吸はれて、脱殻の馬鹿な死骸が、は、は、は、ほかりと浮き上つた時のさまが嫌だ、しかし、めづらしい女だな、かりにも伯父と名乗つて居るくれエだから、萬事の委細巨細を知りぬいた上だらうが、この鯨も兩國の水茶屋以來、そもく今の舞臺を組み立てた材木の繩の端まで承知の男、いや考へりやア考へるほど凄腕だが、惜しい事には物が小せエ、いくら舊家でも内福でも、高が旗本だもの、どうだ、あんな女に少し尾緒を付けて飾つた上、生命を的にした男の十五六人も影身に添つて、五六十萬石以上

るに、就いてだ、こいつが嫌だね、ことしの一月、現に總領を覘つて不意の闇討に飛び出した奴、あれも大方それと悟つて居たが、まづ手強う遣れば、あんな外に急な手段も工夫もあるめエから腰が弱くつて言ふのぢやアねエが、まづ踏み込んで働くに氣が乗るめエと思ふのさ、氣も勢ひも乗らねエ事を今こゝで受合つたところが無効で、却つて船頭が多くなるほど舟が山へ上るの世諺、こいつア御免を蒙りてエ、しかし其外の役廻りといやア、別に人の入る筈はなし、伯父姪とも揃ひも揃つた腕だもの、この鯨を見込んで頼むといふからア、いづれ今の役だらう、よし請合つたところが無効だ」

「いや、そいつア少し見當が違つた、あの闇討も最初から此の上州勝が止めたのを、そかア女だ、上汐の勘太といふ軽い奴を戀仕掛で使つたのさ、元來が戀で使はれる奴、生命を失つて其戀が出来るものか、思ひ切つて踏み込めねエは知れた事さ、ま

た三年は儲置いて、たとひ三日でも思になつた鋒鈍が、鈍らねエで何うする、は、は、こいつばかりやア鯨の見當違ひ、實ア、そんな際どいこつて頼みに来たんぢやアねエ、三年と言つても三年の今日から大手を振つて江戸の八百八町を鼻唄で歩ける身ぢやアあるめエ、ところを附け込んでといふ理由でもねエが、どうだ、もう一年もとの要助さんになつてくれめエか、身體を屋敷へ入れて後ゆるくと頼みてエ、それも刃物三味は一切無用にして、いはゞ目色と舌一枚の活動で濟む事さ、もし爲損じたら要助さんそのまゝ高見の見物で、は、は、は、は、しづくとお立退き遊ばして宜いのさ、全體この上州勝は刃物三味は大の嫌エさ、時と場合の意氣張で、據なく人も斬つたこたアあるが、自分から好んで蟲一疋も殺した事のねエ男、實のところ血を見る氣なら何の譯のねエ事、たゞ人を痛めずに、うまく首尾よく遣らうと思へばこそ首も傾け骨も折るのさ、つまり鯨の與五郎に元の要助さんになつて